

TBSは間違っていない

TBSテレビに対する非難が全社会的に生じているが、その要点をまとめると、

① 89年10月26日夜に来訪したオウム幹部に坂本弁護士とのインタビュのビデオフィルムを見せた。また、見せたことを口外しないようにオウム幹部へ依頼した。

② オウム幹部の抗議、告訴予告や、今後の取材に際しての信頼関係を配慮して、前記のインタビュの放送を中止した。

③ その経過を番組で公表する、坂本弁護士ら関係者へ伝える、警察へ通報する、というような措置を直後にも、坂本弁護士一家の失踪後にもおこなわなかった。

④ 他のマスコミが問題とし、国会へTBS幹部が召喚されても、不十分な社内調査に依拠して、質問者の認識に反する主張をした。

⑤ 全般的にオウム批判の姿勢が他のTVと比べて弱く、捜索日時を事前にオウムへ伝えた可能性や、村井刺殺プランの情報を得ていた可能性などの疑惑もあり、今回の問題に関しても最終的には自らの誤りを認めたが、反省の色が薄い。

およそこれらの点について非難を受け、政府からの法的制裁(放送事業の認可取消)を受ける可能性もあり、当然とみなす人が殆どであるが、問題点を把握する位置を変えてみるとうなるか。

かりに、あるTV局が捜査当局の非公然的要請に応じて未放送のビデオフィルムを見せたり、放送を中止した場合に同じように問題になるだろうか。そのようなケースは例外的であるとしても、会社上層部やスポンサーの要請に応じて見せたり放送中止したりという事態は、ごく普通にあるのではないか。いや、それ以前に、会社上層部やスポンサーが事前に見せろとか放送を中止しろと要請しそうな内容の番組にしないような内的な自主規制が日常的に機能しているはずである。そのような拮据の中で今回の問題をとらえ直してみると、今回の問題はTBS(の幹部よりは下部の社員、さらには社外の取材担当者)の一定の自由な雰囲気、自主性への攻撃の意味を背景として持っているのは明らかである。

勿論、この問題は、前記の背景を超えて、坂本弁護士一家殺害事件やひいてはサリン事件の発生の有無にも関わるという意味で重大視されているのであるが、それは結果論であって、さまざまの(まだ公表されていないものを含む)社会的ないし個人的要因、その経過の錯綜や時間差がオウムの行動プランに影響を与えているはずであり、オウム関連事件の責任をTBSに負わせることはできない。個々のスタッフが内的な責任を痛感することまでを否定しないが、外部からの批判は有害である。前記の①⑤は、内実としては、柔軟性のある放送関係者の常識的な対処の仕方であり、これ以上に責任感?の強いTV局やスタッフの作る番組は多分つまらないし、事件に深く関わるラディカルさを持ちうると思えない。

国家権力は、オウムを口実として（他の組織への適用の準備として）破壊活動防止法を適用しつつあるが、同じやり方で、TBS問題を口実として放送、報道総体への規制強化を意図している。今はTBS（の幹部よりは、下部の社員、さらには社外の取材担当者）の擁護が必要であるといわざるを得ない。会社による現場の担当者の懲戒解雇処分や締めつけ強化、自分たちは無関係なのに、という「例外的」当事者への社内からの恨み…に対して、内部の良心的な労働者は闘っていくのが当然であり、共闘する。

註

1―捜査当局は前記のビデオフィルムを95年10月段階に提出させて、報道の自主性に介入しているから、番組の担当者がオウム側へ見せたことを批判する立場の人は、これも対等に批判すべきである。捜査当局は権力行使に加えて、他のマスコミにリークする方法でTBS包囲網を敷いていたが、その効果が全社会的に拡大した段階を見計らって、96年3月27日の早川氏に関する公判でオウム幹部の獄中での供述調書を朗読することによりTBSたたきの最終場面を演出した。このような手口に影響されている人々には、TBSの報道姿勢に限らず、オウムのマインドコントロールを批判する資格はない。

2―今回の問題で本当に注目すべきなのは、オウムだけでなく住専・薬害エイズ・沖縄などの問題の根源を戦後50年の矛盾の蓄積との関連において謙虚に説明していかうとする社会的雰囲気、オウム裁判のショー化とTBSへいじめへ、国家権力によって誘導されていることである。そして、自分の生き方や発想が根底的に問われることを嫌悪する「中流」化した多数の日本人が、その誘導にひかかって参加しているのである。

3―もう一つ関連して問われているのは、現代社会における情報の位置、それを把握し応用する本質的意味である。オウムであれ、権力であれ、任意の組織や個人であれ、この社会に流通する様々の情報を自らの利益になるように追求したり利用したりする傾向は加速度的に増大しているが、その場合に不可欠なのは、ある情報を把握・応用したくさせた当事者だけの責任を問うのではなく、情報の把握・応用の仕方がこの世界のどの存在にとって、どのような価値を持つかに重点を置いて評価していく態度である。

4―3の視点からは、オウムがTV局で得た情報を基にして行動を企図したとしても、それは、かれらが国家権力や巨大資本に拮抗するまでに形成した実力の成果であるということが可能であり、その実力の内容と、殺人という行動へ短絡する発想の批判を、国家権力や巨大資本の実力や発想の検討と共に（その否定面を転倒する方向で）おこなうことを中心テーマにすべきなのである。情報の媒体や、実際の取材に関わっている労働者にオウム事件の全責任を転嫁するのは重大な誤りであるといわざるを得ない。このように論議の座標を転倒く拡大した場合には、TBSの対処の仕方がむしろマトモであり、非難する側の方の偏向こそが問題であるという指摘を、この項目のタイトルに込めた。

(d)

「テロ集団、早く消滅を」

坂本弁護士事件
口頭弁論始まる

坂本堤弁護士(当時三三)一家三人殺害事件で、遺族がオウム真理教と麻原彰晃被告、事件の実行犯とされる教団幹部五人を相手に総額四億九千万円の損害賠償を求めた訴訟の第一回口頭弁論が二十二日、横浜地裁で開かれた。原告本人の意見陳述で、坂本弁護士

の母さちよさん(会)は「堤と都子と龍彦を戻してほしい。帰ってきてほしい。でも、それはどうにもならないから、この裁判で一日も早くオウム真理教を解散させてほしい」と述べた。

坂本弁護士の妻都子さん(当時二九)の父大山友之さん(会)と、母やいさん(会)も意見陳述に立ち、「オウム真理教なるテロ集団はたとえ瞬時であってもこの日本にあってはならない。一刻も早く消滅させてほしい」などと訴えた。

被告側は、麻原被告を除いて五被告が答弁書を提出したが、中川智正、端本悟両被告が事実関係を認めた。坂本弁護士の遺族は、新実智光被告が全面否認。早川紀代秀、岡崎一明両被告は請求棄却を求め、事実関係は留保した。遺族らの記者会見も、TBS退席させる遺族と弁護士団が閉庭後に横浜弁護士会館で記者会見した際、弁護士が「遺族の要望」を理由に、TBSの取材陣を退席させた。

96年3月23日 朝日新聞

刊行委の註「TBSは、4月30日に社内調査の最終結果報告と検証番組(TBSテープ問題について)を放送した。コマーシャルなしでおこなったのは、マスコミュニケーションの最終形態を無意識にせよ実現しているのに興味深かった。しかし、放送内容そのものは、この項目で「間違っていない」と提起している水準から(内外の圧力にやむを得ず屈した結果であるとしても)既成秩序の価値判断へ復帰している度合だけ間違っている、といわざるを得ないし、この放送に関わった当事者たちも内心で感じているはずである。この放送自体の検証と止揚が今後必要であり、私たちも、その実現に共闘していく。

5―刊行委としては、95年5月12日のTBSの番組「ブロードキャスター」が「神戸大学闘争史」の紹介を踏まえて松下やオウムの早川氏の報道をしたセンスを高く評価しており、その位置づけを批評集a篇3でもおこなっているが、この番組の切り込みの鋭さについては、自民党議員が国会質問の中でオウム問題におけるTBSの責任追求のムードに便乗して住専問題に関する「ブロードキャスター」などの報道姿勢について示した反発（転載記事a）からも証明されている。そして、これは自民党内タカ派のTBS非難のレベルを思わず露呈してしまっているといえる。

6―与党の自民党議員だけでなく、野党の共産党議員の質問ぶりもひどいものであった。しかし、正義の？味方よろしく居丈高に迫る各議員に対してTBS代表者が示した平明な応答ぶりは時として見事であった。（転載記事b、c）「被告人」的な位置に引き出されて糾弾されている情報企業の管理者の方が与党は勿論、共産党よりも「革命的」であることを示す瞬間であったといっていよい。勿論、その本当の意味に気付き、応用していく作業は、TV局幹部に対してよりは、管理者をこのような場でこのように振舞わざるを得なくさせるまでに成長している現場の労働者に対してこそ期待するのであるが。

7―今回のTBS問題において圧倒的な既成の非難の水準に対応して「反省」する報道関係者は真の情况的課題から失墜しているのは勿論であるが、非難する方とされる方の双方が気付いているある空白の感じは、いま予測し得ないような可能性の芽になっていく気もする。TBS関係者に限らず、取材する特権性に無自覚になりかねなかった報道機関自体が他の報道機関の報道対象になりうることや、大多数の日本人が示す愚かしさを目撃し、非難の底の浅さを痛感した人々の中に、それらの向こうにある空白をみつめ、今後のより広く深い活動へ結実させていく決意を抱いた人が存在することを疑わない。

8―これも記しておきたいが、坂本弁護士事件の遺族が記者会見の場からTBS記者の退席を求めた記事（d）や、「江川紹子さんが息子とオウムを会わせる契機を作ったから憎い」とシンポジウムで坂本弁護士の母親さちよさんが発言したという週刊新潮4月4日号の記事（立ち読み）を読んで呆れた。犠牲者（の母）の特権性への無自覚が生み出してくる頹廢の一例であるが、かの女もTBS非難の演出の犠牲者であり、50年前の戦争で「鬼畜米英」を信じ切っていた日本の母たちの姿が重なってきて哀しい。

9―一挙に時間を30年以上前にワープさせることになるが、このTBS論には60年安保闘争後の混乱の季節における記憶が介在している。（次のページの関連資料参照）いまTBSを最もしつこく糾弾している共産党は、この情報を徹底的に利用して反日共系左翼の革命性を傷つけようとした。しかし、松下ら共産主義者同盟（フント）の多くはTBSへの抗議などせずに、その情報の意味を内的に抱え、鍛え、真の反革命である共産党に反撃し、より巨大な敵や問題と格闘してきた。その成果は、とりわけ60年代末以降の私たちの軌跡に示されている。今回のTBS問題への言及には、このような経過に由来するTBSの歴史への屈折した？親愛の念も交差していることを付記しておく。

反安保闘争の悪化動について

(前略)

唐牛健太郎が、一個の市民、または人民的生活者として田中清之の企業で飯を食おうと、どこで飯を食おうと、それは、諸個人の恣意の問題であり、そこには、当人が賦与しているような思想的意味も、他人が非難しているような思想的意味も、特別に存在しえない。人はだれでも、かれを一個の「生活史」としてみれば、支配によってその生活を司られている。田口富久治が、デマゴギーによって対比するように、「岸の金によって岸を倒す」ということが背理ならば、資本制社会で、その「生活史」を司られているものが、資本制社会を否定する運動をすること、思想をもつことが背理でなければならぬ。もしもたつて、学校経営資本や国家資本に寄食して、社会主義的な言辭を弄する学者の存在も背理というべきであらう。この問題のなかには、ボタンをおして核バクダンで多数の人間を殺生するものは、「感覚」的には抵抗を和らげられるが、手斧をもって、他を殺生するときは、たとえ一人の人間を殺すばかりでも、無限の「感覚」の抵抗を強いられるはずだということとおなじ問題しか存在しないのである。

階級社会における「生活史」を諸個人としての「生活」に還元するかぎり、一人の人間が、資本家になるとか、検事になるとか、権力者になるとかいうことは、どのような立場から何の問題にもならないのである。このような恣意性を「強いられる」ことのなかに資本制の本質は存在しているからである。

何故に、マス・コミらは、日共らは、そして、知識人らは、それを問題にするのだ？ そこには、三年間の歳月を無視した詐術が存在しており、また、かれらは、一樣に古典的転向論に左右されている。三年前に全学連の幹部だったものが、三年後に一個の市民、労働者として縁故就職した？

政治責任？ あるいは変節？ かれらは、それを問題にするのだろうか？

わたしのかんがえでは、それは間違いである。唐牛らが三年かかって、そこに何らかの思想的「変化」がおこっているとすれば、そこに安保後の「情況」の変化が、「先駆的」に象徴されているものをみるべきなのだ。唐牛らに石を投じているものの内部に、いまだ顕在化されていない「変化」が、そのなかに先駆的に示されているのである。いいかえれば、石を投じている者は、鏡に映ったじぶんの姿に石を投じているのだ。そして、わたしたちに、強いられている思想的、現実的課題があるとすれば、このような「情況」の変化を、いかにして止揚しうるかという困難な問題のなかにある。わたしひとりとは、別物だなどと考えているものは、清沢二のものが判らないのである。おかつたものに情況を動かすことも、支配することもできないのは自明である。つまり「情況」外の存在である。

革共同全国委員会機関紙「前進」三月十一日号には、また、かれらの同志そのものである唐牛・篠原を、革命運動から脱落した転向者であると指弾している。ここには、組織エゴイズムとネオスターリニスト的発想の再生する姿しかない。しかし、「情況」は、革共同全国委を第二の「日共」に成長せしめることも、唐牛らを第二の「田中清玄」に変質せしめることもありえないだろう。

わたしたちは、歴史の地殻の変化をその程度には信じてもいいのである。

模写と鏡

昭和三十九年十二月五日

第一刷発行

著者 吉本隆明

東京都台東区初音町四ノ二六〇

刊行委の註―唐牛氏が、この文章を読んで救われる思いをした、と語っている記事を80年代にどこかで読んだ記憶があるが、まことに、批評は人を救うこともあり、その影響は何十年も持続するのであることを自分自身についても確認する思いであった。私の表現は、まだまだ人を救うだけの力を持っていないが、持ちたい願いは持ち続けている。(松下)

東京
放送

「全学連闘士のその後」の波紋

森田実氏ら抗議の声明を発表

三月二十六日夜九時半から東京放送ラジオが放送した録音成・報道シリーズ「ゆがんだ青春——全学連闘士のその後」は、安保闘争当時の唐生健太郎全学連委員長、東原吉伸財政部長、篠原浩一郎中執らが、現在、右翼の田中清玄氏（戦前、武装共産党を指導、のち転向し、今は土産業、田中技術開発総合研究所を経営）のもとで働いている、と報道した。

そこには、関西で田中氏の建設会社や荷役会社にいるという東原、篠原両氏の談話や、唐生元委員長を同席させてインタビューに応じた田中氏の語のほか、以上西氏とは別に安保闘争当時の学生運動活動家数氏の語が録音されている。

安保闘争における全学連の運動は、現在、その一部元幹部が右翼田中清玄氏のもとに行った、というところその歴史的な意味を窺えらるるものではないが、2月28日、3月1日の共同発表新聞「アカハタ」はこの放送を大々的にとりあげ、暴露された全学連トロツキストの正体——田中清玄が戦術を指導と攻撃している。

この問題について、放送に録音された森田実（元全学連共同部長、現在労働運動研究会々員）、小島弘（元全学連副委員長、現在労働運動研究会々員）の両氏は連名でつぎのような声明を発表した。

声 明

一、二月二十六日夜九時三十分から三十分間にわたってTBSによって報道された「ゆがんだ青春——全学連闘士のその後」は安保闘争と学生運動にたいする悪意に満ちた中傷である。この報道にわれわれ二人の発言が引用されたことについて、責任を痛感し、ここに事実経過とわれわれの基本的態度を表明する。

一、われわれはこの放送に関し三月一日、TBSラジオ報道部にたいして、取材経過に関し、次の諸点について抗議した。

①森田はTBS記者の取材要求をうけておらず、取材目的も知ら

されていない。森田宅を訪問した共同通信村岡記者に同行したTBS吉永記者が、森田にことわらずに、村岡記者との雑談をテープに収録したものである。森田は非公式の談話が収録されていることを途中で気づき、非公式談話は放送しないことも、もし放送する場合には、森田の同意の上で行なうことを要求し、吉永記者もこれを承諾したが、しかし、吉永氏はこの約束を守らず、その後、何らの連絡もしなかった。これは放送記者としての道義に反する、背信行為である。

②さらに森田が責任を持たぬと宣言した談話を収録したテープを某氏に聞かせ、彼の談話をとるために利用したと、その某氏より連絡があったが、事実ならば、これは放送記者としての道義に反するので、調査の上善処されたい。

③アカハタの森田談とされているものはTBS放送にもなく、全く事実無根であるが、明らかに放送されない部分とおぼしき言葉が引用されている。もし、森田宅を訪問した両記者の取材内容が共産党に伝わったものであるとすれば、事は重大である。調査の上善処されたい。

以上の諸点を口頭で伝えたが、三月四日TBSより森田に電話があり、第一の点についてはTBS記者の非を認めおわびする。第二、第三の点については、TBSとしては、そういう事実はないと返答した。

一、三月五日、森田、小島の連名で、日本共産党東京本部書記長あてに次の抗議文を送付した。

「①二月二十八日付、アカハタ記事『全学連トロツキストの正体』は悪意に満ちたTBS放送にひん乗し、安保闘争の中での学生運動の役割をねじまげようとするものである。

②記事中の森田談として引用されている部分は、TBSの放送とまちがひ、事実無根である。よって、記事の取り消しと謝罪を要求する」

一、以上のことと関連して、次の事実のあったことをつけ加えておく。

二月二十八日夜九時半より十二時ごろにかけて、数回にわたる前記のTBS放送に関して森田宅にいやがらせの電話がかかった。

東京は電話で、東原らのグループが、森田・小島を襲う計画があり注意を要するとの連絡を受けてきた。午前一時二十分ごろ森田宅の呼鈴を鳴らすものがあり、出てみると約三人が、森田宅のまわりをうろついていたが家の中に多数の人ありとみたが、すぐに引上った。TBS放送に関し、東原らのグループから、いやがらせや脅迫があるとはわれわれには予想できなかった。かかる事態について、われわれは深く遺憾に思っている。

一、日本共産党は、TBS放送を最大限に悪用し、安保闘争の真実をくつがえそうとしているが、しかしそうしたことによって、歴史的実実が変えられるものではない。安保闘争における全学連の偉大な役割と、それとは対照的に全学連を非難し続けた共産党のヒソソな行為の事実が少しも変更されるものではない。ここで明らかにしておきたいことは、安保闘争における学生運動は全学連自身から指導したのであって、外部の誰かが指導したなどということはない。事実上反するといふことは、全く事実と反するといふことである。「田中清玄が指導した」という篠原の談話らしきものは、全くのデマであるといふことである。

一、かつての全学連指導者のうち二三人の人が、田中氏のところに就職し、ないしは、世話になつて就職したことについては、われわれが明らかにするまでもなく、すでに周知のことであつた。TBS放送及びアカハタは、全学連の元幹部がすべて、そのような関係をもっているのかとく報道しているが、これは全く不当なことである。かつての学生活動家で、共産党から結縁したものほとんどは、従来の運動理論の根本的克服のために、日夜勉強しているものである。あるものは運動の中に残り、あるものは学校に残り、あるものは就職したが、これらに共通するものは、すでに限界の明らかとなつた従来の理論の克服であり、現代社会に対する批判的理論的究明である。

この事実を無視して、日共に反対するものは、すべて附属の道を歩むかのごとく印象を与えんとする行為は、許すことはできない。われわれは、全学連に関するつわさが、途方もなく拡大され、全学連に悪意をもつものによって利用されていることを指摘したい。

一、われわれは、安保闘争を闘つた学生運動の延長線上にたつていて、学生運動への支持を惜まない。われわれは、第一組合を育成し、労働運動を分業させてきたものと学生運動を結合させようという動きには反対するが、こうした一部の動きをとりあげ、学生運動を破壊しようとする日本共産党と闘う。

一九六三年三月九日

刊行委の註一青酸ガスに限らず、オウムの使用した武器の素材、製造、意図が、いずれも既成の反体制集団の水準を超えているとまでいえないとしても、はみ出しているということはでき、その〈自在さ〉がどこからくるのか、どのように止揚可能かを検討することには意味がある。96年2月に東京拘置所から見事に脱出した7人のイラン人についても！

青酸ガス装置製造を認める
平田容疑者
東京のJR新宿駅で、地下鉄有楽町線のホームに今年七月、時限式の青酸ガス発生装置が仕掛けられた事件で、特別手配中に前橋市内で逮捕されたオウム真理教「謀報」(ちようほう)省「所」の平田容疑者(30)が二日までの審判で調べに対し、「自分が装置をつくった」と認める供状を始めた。
調べでは、装置は希硫酸と青酸ソーダを別のポリ袋に入れ、時限装置のついたカッターのようなプロペラが回ると、混ざりあつて青酸ガスが発生する仕組み。平田容疑者は調べに対し、二つの装置を逃走中に潜伏先のアジトでつくったことを認めているといふ。
平田容疑者が一時潜伏していた栃木県栗山村のテントの近くからは、青酸ソーダ五百グラムの瓶十九本が見つかった。

95年11月2日 朝日新聞(夕刊)

オウム ダイオキシン計画も 製造失敗し、青酸ガスに
東京、新宿の地下鉄有楽町線のホームに今年五月、時限式の青酸ガス発生装置が仕掛けられた事件で、特別手配中に前橋市内で逮捕されたオウム真理教「謀報」(ちようほう)省「所」の平田容疑者(30)が二日までの審判で調べに対し、「自分が装置をつくった」と認める供状を始めた。
調べでは、装置は希硫酸と青酸ソーダを別のポリ袋に入れ、時限装置のついたカッターのようなプロペラが回ると、混ざりあつて青酸ガスが発生する仕組み。平田容疑者は調べに対し、二つの装置を逃走中に潜伏先のアジトでつくったことを認めているといふ。
平田容疑者が一時潜伏していた栃木県栗山村のテントの近くからは、青酸ソーダ五百グラムの瓶十九本が見つかった。

95年11月25日 朝日新聞

当局の調べで明らかになった。地検は同日、殺人目的の青酸ガス製造などにかかわったとして、教団幹部四人を殺人未遂の罪で東京地裁に追起訴した。
追起訴されたのは、教団「謀報」(ちようほう)省「所」の井上嘉浩(33)、トップの井上嘉浩(33)、「法皇内匠」トップの中川智正(33)、「科学技術省」幹部の豊田亨(30)いすれも殺人罪などで起訴Ⅱの三被告と「法皇内匠」幹部の富永昌宏被告(32)殺人未遂罪などで起訴。
調べによると、井上被告らは教団に迫る捜査を妨害するため、猛毒のダイオキシンを製造して都内に散布することを計画。逃走先の東京都八王子市内のアジトで、ダイオキシンの原料を調達して製造を試みたが、失敗を繰り返した。このため、青酸ガス発生装置を仕掛けることを思いついたといふ。

戦争と日常とダイオキシンの

（サリン事件へのもう一つの視点）

オウムに対する警察の捜査を混乱させる意図で実行された95年5月の青酸ガス発生事件は、オウムにより、まずダイオキシンの散布として計画されたが、製造が困難であるために青酸ガスに変更されたという記事（このページ右に転載）がある。この記事を読んで、いくつかの感想を持った。

①ダイオキシンの散布として計画された理由は何であるか。3月20日の地下鉄サリン事件以降には警察の捜査との関連でサリンの貯蔵分を廃棄したためにダイオキシンの製造と散布を思いついたのかも知れないが、ダイオキシンがベトナム戦争で「枯れ葉剤」として使用されていたことをオウムは知っていたかどうか。さらに遡行していえば、かなり前からサリンの製造を開始していた過程で、サリンと第2次世界戦争や湾岸戦争の関連についてオウムはどのように把握していたのか。

②ダイオキシンよりも青酸ガスの方が簡単に製造できるというのは本当か。ダイオキシンは日常的に大量にゴミ焼却場で発生している。ポリ塩化ビニール、プラスチックなど塩素を含むゴミを不完全燃焼させる場合に発生しやすいが、日本における規制の基準は国際的に見てないに等しく、現場の労働者への配慮も、原発で働く労働者に対すると同様に極めて乏しい。これらの事実についてオウムはどのように把握していたのか。

①はオウムの無意識領域に影を落としている戦争の問題として、②はオウムの無意識領域に影を落としている日常の問題として関心がある。ただし、私は、オウムの関心の持ち方をストレートに批判するつもりはない。むしろ、オウムが何かを飛び越えてダイオキシン（ないしサリン）へ関心を示した過程で飛び越えた何かとは、私たちのそれらへの無関心さであったともいえるのである。日々ダイオキシンが大量に発生している事態にいくらかの不安を抱きつつも、なすすべもなく放置している私たちの姿は、日本社会の全面的腐敗＝ゴミ化を、なすすべもなく放置しつつ、自らの別の可能性であるオウムへの憎悪で代償している姿へ重なっていく。

かりにオウムがサリンの代りに私たちの生活と基本的に共通なオウムの人々の共同生活から出る廃棄物からかれらがダイオキシンを作り散布したと仮定すれば、オウムへの怒りや批判の質は決定的に異なってくるのではないだろうか。

私たちの日々の生活から出るゴミの廃棄や焼却に関して私たちの殆どは、週に何回か路上に出す、せいぜいゴミの種類を分別して出すというレベルの関心しかなく、そのレベルについてさえも地域、労働条件、プライバシーなどに関わる問題を解決しかねている現状であるが、かりに全ての住民が交代でゴミの収集・焼却に関わるシステムを作り実行するならば、私たち総体の関心と認識は飛躍的に増大するはずである。そして、この試みは、

ゴミ焼却場周辺の異常な発ガン率の謎

20年前に終結したベトナム戦争の「枯れ葉作戦」で使われた枯れ葉剤……。そこには史上最強といわれる毒物・ダイオキシンの含まれていて、今なお人々を苦しめている……。そして、この猛毒は日本列島に見えざる敵として、今日も大気から降り注いでいるのだ。そこで、その元凶ともいえるべき「ゴミ焼却場」を2回にわたってレポートする！

ダイオキシンとは何か？

ダイオキシンとは一体なんなのか。ダイオキシン汚染に詳しい摂南大学の宮田秀明教授は、こう解説する。

「ダイオキシンは有機塩素系の化合物です。基本構造は同じで、異性体といわれるものは75種類あります。それ以外にもポリ塩化ジベンゾフラン、コプラナーPCBという化合物があり、ダイオキシンの仲間に加えられています。これらの化合物のうち13種類の異性体について、その毒性などを評価しています。この中で一番毒性の高いものは2、3、7、8四塩化ダイオキシンです」

このダイオキシンの毒性は

他に類を見ない高さで知られている。

この毒性の被害を過去、最も浴びたのは、ベトナム戦争中に「枯れ葉作戦」で枯れ葉剤の影響を受けた人たちだった。枯れ葉剤の散布が中止されてから20数年経った今も、その爪痕は深い。

ダイオキシンの人体への影響は、皮膚や内臓への障害、発ガン性、催奇形性（奇形を促させること）、免疫抑制などがあるといわれている。

そのベトナム戦争で証明されたダイオキシンによる被害が、これから日本でも広範囲にわたってもたらされる可能性があるのだ。

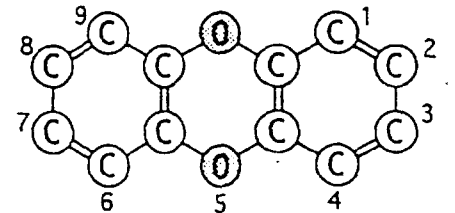
す。合計すると約1.5*になります。この他、大型焼却炉以外の焼却炉が1400*ぐらいあります。しかも、この燃やしたり止めたりという準連続式及びバッチ式の中小の炉の排煙中の濃度は当然、高くなります。この中小炉はゴミの約30%を焼却していますが、排煙中の濃度の高さを考えると、これも同程度に思うわれます。ですから、全体として15*のダイオキシンが排出されていると見積もることが出来ます」（宮田秀明教授）

つまり、年間15*ものダイオキシンが日本中のゴミ焼却施設から排出されているというのだ。

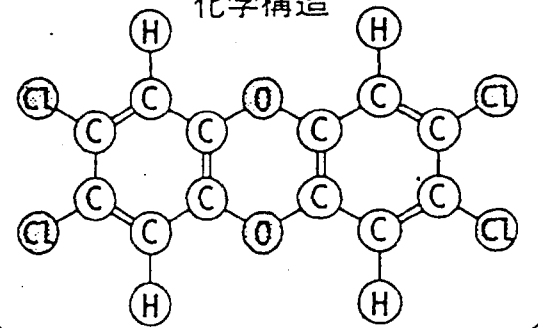
（後略）

「プレイボーイ」95年10月初旬発売号

ダイオキシンの骨格構造



2,3,7,8 ダイオキシンの化学構造



○ 炭素 ○ 酸素 — 一重結合
□ 塩素 (H) 水素 = 二重結合

日本でのダイオキシンの最大の発生源はゴミの焼却施設だ。全体の80%がゴミ焼却場から排出されるといわれる。

「ダイオキシン類は、リグニン（木材の繊維以外のもの）や石油コークス、ポリ塩化ビニール、プラスチックなど塩素の含まれるものを燃やすと塩化ベンゼンという物質ができて、そこからコプラナーPCBやポリ塩化ジベンゾフラン、ダイオキシンが生成されます。塩素源はいろいろなものにあります。紙を燃やしても塩化ベンゼンはできます」

（宮田秀明教授）

つまり、なにを燃やしても

塩素源があるのでダイオキシン類は発生する可能性があるわけだ。

日本には、ゴミ焼却施設は建設中のものも含めると1864カ所。年間にこれらの施設で焼却されるゴミの量は3785万トにもぼる。

「日本は先進諸国の中でも焼却施設が非常に多いですね。国内の大型焼却炉は37カ所あります。17カ所の連続方式の大型焼却炉の平均値から類推すると、大型焼却炉から年間2、3、7、8四塩化ダイオキシンの毒性量に換算してダイオキシン2*、塩化ジベンゾフラン5.1*、コプラナーPCB0.36*が排出されている

悲惨な後遺症を残したベトナム戦争の枯れ葉作戦では、

1962年から1971年にかけて160*以上のダイオキシンが撒かれたといわれている。その10分の1の量が毎年、日本中を覆っていることになるのだ。これが10年続けば、ベトナム戦争で撒かれたダイオキシンの量とはほぼ同量になる。

こうしたダイオキシン汚染の現状はゴミ焼却施設周辺の住民に危機感をもたらし

ダイオキシン大量発生

大震災被災地

大火、廃材野焼きで 地元住民「健康に不安」

日常や戦争をとらえかえす契機になりうるばかりでなく、現在社会の政治や経済のシステムの改革への示唆を与えるであろう。

オウムとダイオキシンという関連だけでなく、地震とダイオキシンという関連(左の転載記事参照)もある。被災地で大量発生しているから目立つとしても、私たちは日々様々の「ダイオキシン」のたまたま戦場あるいはゴミ焼却場としての現代社会の真っ直中にいるのだ。

阪神大震災の被災地で、発がん性があるとされる猛毒・ダイオキシンが、国内では過去に例のない規模で発生していることが三日、摂南大学(大阪府枚方市)の宮田秀明教授(食品衛生学)グループの調査で明らかになった。震災後に行われた解体家屋などの震災廃棄物の野焼きや火災が主な原因。兵庫県などは「被害はない」としているが、国内にはダイオキシンの規制はなく、不法投棄による野焼きも一部で続いている。

摂南大調査

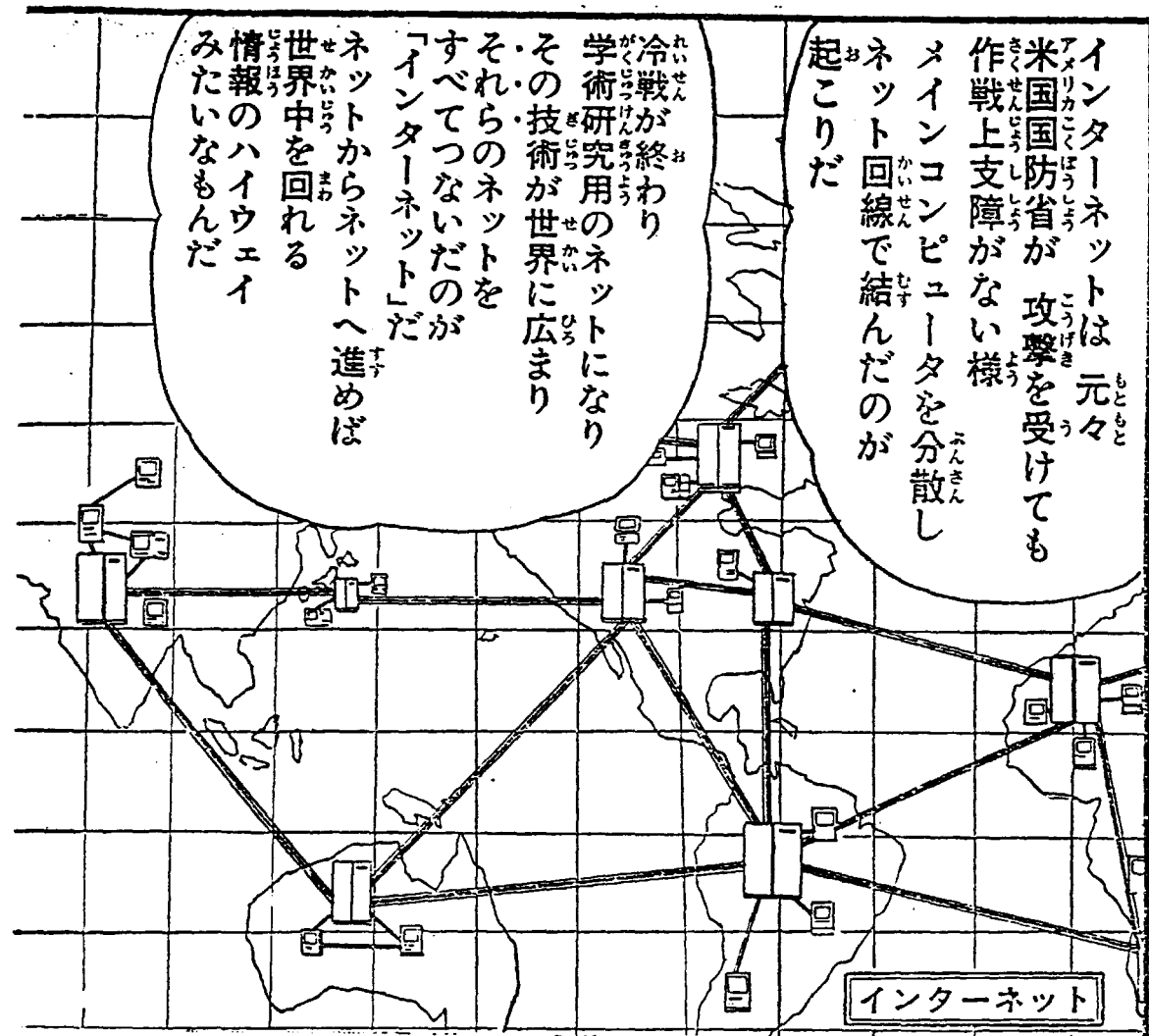
国内の1年分に匹敵

調査は昨年二月、西宮、尼崎、宝塚の三市十地区の野焼き、火災現場の灰を使って行った。灰は全体で計八万トンのほり、このうち二百トンを採取して分析、測定。昨年末、調査結果をまとめた。検出されたダイオキシンはコプラナーPCB、ポリ塩化ジベンソフラン、ポリ塩化ジベンソパラダイオキシンの三種類。三種類のダイオキシンは、ベトナム戦争で枯れ薬剤として使用された最も毒性の強い「2・3・7・8-四塩化ジベンソパラダイオキシン」(2・3・7・8-TCDD)で換算し、全体の八万トンを計算し直した。この結果、コプラナーPCBは尼崎市で十二、▽西宮市九・八、▽宝塚市〇・五七の計二・二七、ポリ塩化ジベンソフランなど残り二種類を加えると、発生量は計約六〇。煙とともに大気中に飛散したのはいくつかの点で、灰の十倍と見込まれる。また、調査地点のダイオキシンは少なくとも二〇〇と推定した。この量は日本中の焼却炉から排出される一年分のダイオキシンにほぼ匹敵するとみられる。さらに、被害が最大だった神戸市分の野焼きが不明な神戸市分と同市内で八十二と推定され、これを高温で燃焼させた際の化学作用でダイオキシンが発生する。野焼きは有害物質を飛散させるため、廃棄物処理法で禁止されているが、自治体は処理能力不足を理由に五月末ごろまで続けた。「発生量の抑制を」宮田教授は「今後、病気に対して抵抗力が弱まるなど人体への影響が出てくる恐れもある。野焼きの監視はもうそろそろ、自治体は早急にダイオキシンの発生量を抑える必要がある」と話している。中尾清二・兵庫県環境局長は「昨年三月の環境調査では『大気中に飛散しているダイオキシンは微量。健康に問題はない』との調査結果が出ている。当面は健康調査などの予定はない」と話している。

ダイオキシン、ベトナム戦争で米軍が枯れ薬剤に使用し、奇形児出産の原因になった化学物質。自然界にはなく、「人類が作った最悪の毒物」「胃酸カカリの千倍以上の毒性」ともいわれ、

ごみ処理場や製紙工場の排水などから検出される。2・3・7・8-TCDDが最も毒性が強く、催奇形性や発ガン性がある。

なお、SFの中で素材となったゴミについては、概念集6の25ページで少しとり上げ、排泄に関しては概念集8と12では重要テーマとして論じているが、今後も機会に応じて展開する。ここでは、宇宙のゴミについて記す。現在、地球の周囲を回っている人工衛星は約四千七百個で、今後も年間百個以上が打ち上げられ、使用終了後のものや遠隔操作に失敗したもの的一部は宇宙空間のゴミとして漂い、一部は地表へ落下してくる。この宇宙空間のゴミは、人類の大多数が追求作業を放置し、かつさせられている戦争と日常のテーマの比喩であると共に、人類の未来の運命の比喩でもある。これを解決しうる方法をオウムを超えて、どのように発見するか…。



少年ジャンプ 96年3月18日号 秋本治「こちら葛飾区公園前派出所」から

- (1) 情報を含む技術の原理や構造や操作について、任意の人に等距離に解放されていない場合は、原則として否定的にとらえる。
- (2) 社会総体が必要であると認めうる技術を用いる場合には、全ての人が対等に交代で仕事につく。仕事のやり方や内容に異議が出た時には、中止して討論する。
- (3) 現段階で最高の技術とみなされているものの成立過程を、他にありうる異なる原理・体系の技術の成立過程から相対化する場を恒常的に作る。 概念集2 (89年9月)

インターネット概念の解体と再生のために

インターネット概念をコンピュータの技術的原理や実際の使用・アクセス方法、応用範囲や今後の展望から提示し分析するよりも、インターネットを比喩的媒介として何かへ吸引されていく私たち個々人や社会総体の失墜感覚とでもいうべきものへの考察が不可欠であるという気がする。

何かへ吸引されるという場合の対比例として、新しい情報や技術の媒体であるラジオやTVが社会の一部にだけ姿を見せはじめた段階の、それらを購入することが困難な多数の人々の驚きや憧れ、そして何年か後に自分も入手できた頃には、もはやそれを当然のこととしてかつての感覚を忘れている状態を想定するのがふさわしいし、パソコンの進展からその結合・拡大形態としてのインターネットが社会を包囲しても、前記のような推移をたどる面はかなりあると予測できる。

しかし、いま私たちが直面しているのは、前記のような推移からの類推をはみ出す領域であると思えてならない。その理由をいくつか挙げると、

a―たんに新しい情報や技術の媒体であることにとどまらず、その媒体が各人の社会的な存在条件に不可避的に関わり、規定してくる、という予感がある。

b―しかも、その機器について絶えず宣伝される利点や飛躍的な性能向上と、実際に自分が関わる場合に可能な使用範囲との間の大きい落差に対する疎外感がある。

c―接触しうる情報が多すぎて、選択・応用する判断基軸が拡散し、自己と情報の均衡関係の流動ないし崩壊感がある。

どのように対処していくかを考える軸として、すでに概念集2の〈技術〉論で提起しておいた3点から把握してみる。(このページ右に転載)

1に関しては、かなりの任意の人に等距離に開放されているといえる。(経済的に購入が困難な人々や、生理的な法的な拘束状態にあるために使用できない人々の問題を、等距離の開放のテーマに包括していく努力は同時に不可欠であるとして。)

2に関しては、自分の関心や労働条件のレベルで機器やネットワークの意味や有効性のレベルが決定されてくることを厳密に把握すべきであり、機器やネットワークの新しいから逆規定されて対処するのは避ける方がよい。

3に関しては、この項目で提起していることに前記のa、b、cの比重が集中してくるという関係を重視したい。従って、3の視点からa、b、cの問題を把握し直し、それを阻止してくる力とは1、2の視点から対決していくという態度が最も本質的であろう。

3の視点からa、b、cの問題を把握し直すという場合、96年1月に刊行した〈概念集への補充資料〉12ページに転載した〈コンピュータ社会が崩壊する日〉が重要な示唆を

ラプラス変換の公式

$f(t)$	\longleftrightarrow	$F(s)$
1		$\frac{1}{s}$
t		$\frac{1}{s^2}$
t^n		$\frac{n!}{s^{n+1}}$
$e^{\alpha t}$		$\frac{1}{s-\alpha}$
$t^n e^{\alpha t}$		$\frac{n!}{(s-\alpha)^{n+1}}$
$\sin \omega t$		$\frac{\omega}{s^2+\omega^2}$
$\cos \omega t$		$\frac{s}{s^2+\omega^2}$
$e^{-\alpha t} \sin \omega t$		$\frac{\omega}{(s+\alpha)^2+\omega^2}$
$e^{-\alpha t} \cos \omega t$		$\frac{s+\alpha}{(s+\alpha)^2+\omega^2}$
$t^{-\frac{1}{2}}$		$\sqrt{\frac{\pi}{s}}$
$\frac{1}{t^2}$		$\frac{\sqrt{\pi}}{2s\sqrt{s}}$
$f'(t)$		$sF(s)-f(0)$
$f''(t)$		$s^2F(s)-sf(0)-f'(0)$

大村 平「微積分のはなし・下」(72年4月 日科技連)

科学史技術史事典(弘文堂)

ラプラスのま ◆ ラプラスの魔 [英] Laplace's demon ラプラス*はその著書『確率の解析的理論』(Théorie Analytique des Probabilités, 1812)の中で次のように述べている。「ある一定の瞬間において、物質に作用しているすべての力やまた物質分子1つ1つの位置および速度を知りうるような1つの知性があり、そしてこの知性がこれら所与の数値を解析に付すことができるほど広大なものであれば、この知性は宇宙の中の最大の物体の運動もまた最小の原子の運動も同一公式の中に包括してしまうことができるだろう。そのような知性にとって不規則なものなど何1つ存在しないはずだし、空気ないし気体の分子1つの描く軌道も太陽の軌道がわれわれにとって確実に知られているのと同じほど確実に規定されたものと思われるだろう。だがこの大きな問題を解くに必要な所与の数字の数の膨大さから見てわれわれはどうていそのすべてを知りえないし、またわれわれの知っている数値はごく限られた個数のものであるにもかかわらずそれらの大部分を計算に入れ込むことも不可能なほど無力なので、われわれはわれわれの許に順序もなくつぎつぎにやってくるように思われる諸現象をさまざまな隠れた原因のせいにし、これらの隠れた原因の作用を“偶然”という語で表わしているが、この語は結局のところわれわれの無知の表白に他ならない。」つまり確率論とはこの人間の無知をわずかに部分的に救う手段なのである。そして彼の述べたこのすべてを知りうる超人間的知性は後人によって「ラプラスの魔」と呼ばれた。→ 決定論 (遠藤真二)

与えてくれる。ここで指摘されている〈悪意〉との対決方法についてのヴィジョンを構想してみると、

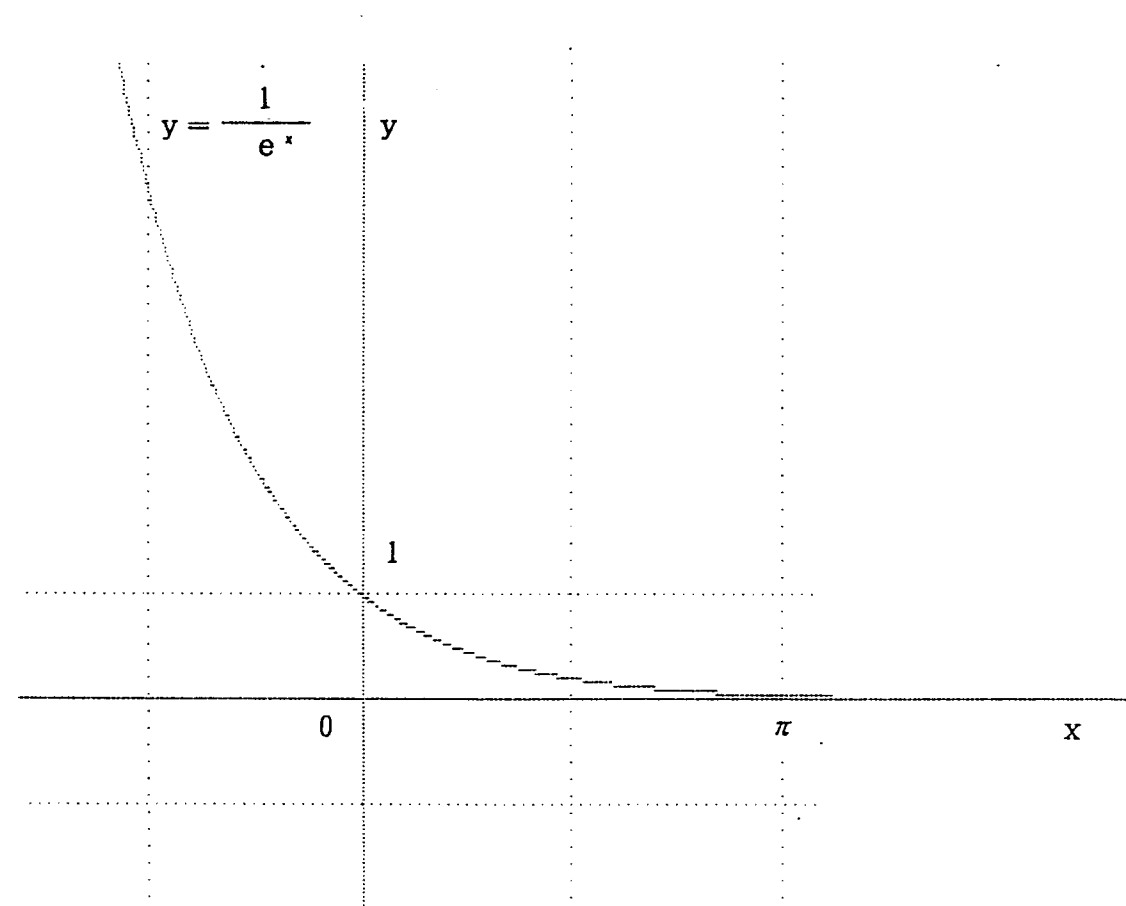
一つは、技術的な応用範囲とレベルの宣伝に対して、その技術によって現在の切迫する問題、例えば、この瞬間に世界に満ちている生命体が発している信号をとらえ、それぞれの間の情報交換・解決への回路を設定してみよ、と逆提起することである。

もう一つは、現在のコンピュータの原理である二進法のデジタル化（全ての情報を0と1のいずれかの記号に変換して分析・総合する。）を超えるような問いなし方法を提出することである。e進法や、数や記号を超えるへゝ進法の構想…。

もともとコンピュータ技術は軍事技術に派生して発展してきたのであり、その出自に内在している文明論的な〈悪意〉に利用されるのではなく、逆にそれを遊びの素材として止揚していくだけの実力を形成する必要がある、そのためには、相手の〈悪意〉を上回る〈悪意〉も必要になるかも知れない。ただ、後者の〈悪意〉は自己目的ではなく、前者が潜在させている〈悪意〉を止揚する公開の回路の形成を目指しており、この回路こそが私たちの救出・創出していくインターネットの基本条件である。（概念集12で論じたライフライン概念の解体と再生の試みとも対応する。）

関連して〈悪意〉とか〈悪魔〉について考えている時に想起したイメージの一つを記すと、ラプラスの魔（このページ右の説明参照）の「宇宙のすべての物体の動きは把握・予測可能である。」という発想は、「インターネットが最大限度に行き渡る社会では、情報の動きが全て把握できるから、その情報によって動く社会や人間の動きも把握・予測可能である。」という発想を導いていくのではないだろうか。いや、あえていえば、ラプラスの魔的な発想がインターネット概念の生成に深く関わっているのではないだろうか。そして、ラプラスの想定に比べて確固とした現実の網として形成されているために、私たちは逃れることが困難だという絶望もある。しかし、ラプラスの想定が不確定性理論（註2参照）によって崩壊するのと同様に、また、「宇宙のすべての物体」と「情報によって動く社会や人間」の位相の差のために、インターネットの万能性神話も崩壊するであろう。ただし、人類史がインターネット概念に到達した意味は転倒的に引継ぎ応用していきたい。

そのためにも、ラプラス（1749～1827）については、その限界だけでなく、すぐれた達成（や応用可能性）の確認も必要である。すでに概念集4の4ページで少しふれているが、微分方程式の複雑な計算を簡単な代数計算ですませることを可能にしたヘラプラス変換の方法（このページ右の公式参照）は、私にとっては実際の計算について便利である以上に、その発想の根拠が与える示唆として重要である。詳しい説明を飛び越えて核心のみを示すと、ある関数（ x ）を0から ∞ まで積分する場合、多くの場合は発散するが、ラプラスは0から ∞ まで積分しても発散しないで有限値に収束するような関数（ y ）を見つけて、それをある関数（ x ）に掛け合わせて関数（ z ）をつくり、それについて0から ∞ までの積分を検討することを媒介して元の関数（ x ）の性質の把握や計算を容易に



したと要約することができる。私はここに無限に暴走しかなない現在の文明＝関数（x）
にとっての関数（y）は何かという問いを希望のように見出している。

註1ーラプラス交換の発想を可能にした関数（y）は、原型として示すと

$$J(x) = \frac{1}{e^x} \quad \text{であり、このページ右に描いてみる。自然現象の数式化には}$$

o. が含まれることが多いために、これを関数（x）に掛け合わせる場合の有効性が
生じてくるのであろうが、これに対応する私たちの関数（y）をつくり出し関数（z）
として現代文明批判に応用したいと夢想している。

2ーラプラスの魔的な決定論は、限界をもつ過去形の理論であるとはいいい切れない。そ
の理由の一つは、決定論を超えるとされている不確定性理論自体の限界である。これに
ついては、東見史氏が『ポスト「不確定性」文明の曙』で問題提起しており、氏はラプ
ラスには言及していないが、「観測の場」や「階層」や「意識の形成」の概念を導入
して不確定性理論を再検討する姿勢は、私たちの位置からラプラスの発想を再検討する
意欲を喚起してくれる。それは氏の考えを深化させるためにも必要であると考ええる。

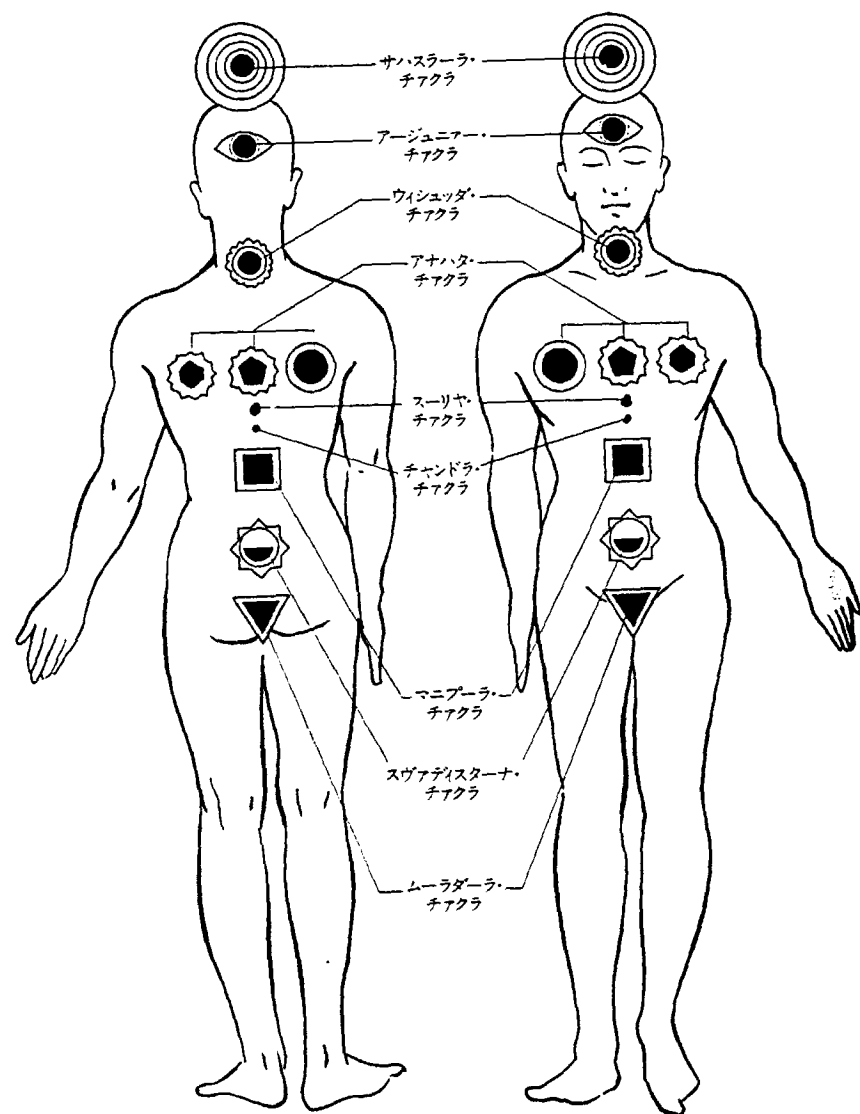
もう一つの理由は、ラプラスのいう決定論の主語としての「超人間的知性」の問題であ
る。この二百年の人類史は、人間の自由と平等を自明の前提として掲げつつも、実際に
は、さまざまな「超人間的知性」を志向する主体やシステムの出現や支配を阻止できて
いず、これからも加速度的に力を増す可能性のあるそれらとの対決のためにもヘラブラ
スの魔＜概念は再度想起されてよい。

3ーインターネットの特性の一つは、各端末が中心となって情報を発信しうることであ
り、これは「超人間的知性」の要素をもって一方的に情報を伝えてくる国家やマスコミ
よりもすぐれているといつてよい。ただし、このような特性自体がインターネットをつ
くり出し、流通させている「超人間的知性」によって一方的に具体化されていることの
意味を踏まえ、その逆過程と転倒を絶えず目指していくべきであろう。

4ー電子機器は高度な感じをもつが、例えば地震や磁力変化に対して極めて面白いこと
も立証されている。従って、それらに慣れてしまふのではなく、それらがいない状態で生
きていくことを基本として、かつ製造／使用の全過程に関わる距離を測定しつつふれる
ことに意味がある。全ての機器や関係についても、位相差を把握しつつそつうしたい。

5ー歴史的に見ても、文字や本や情報が一部の者による独占から社会的共有度を深めて
いくのはよいことであり、必然でもあるが、インターネットの技術の高度さや使用台数
ではなく、それによる情報を全ての人々生命体に役立つ方向で生かす方法の確認と共有
の度合でこそ、社会的共有度は測定されるべきであり、この視点からは、まだまだイン
ターネットの社会的共有度はゼロに近く、転倒していく積分方法の発見が必要である。

6ーどのような機器も組織も、それに関わる人のレベルとの相乗積の機能しかない！



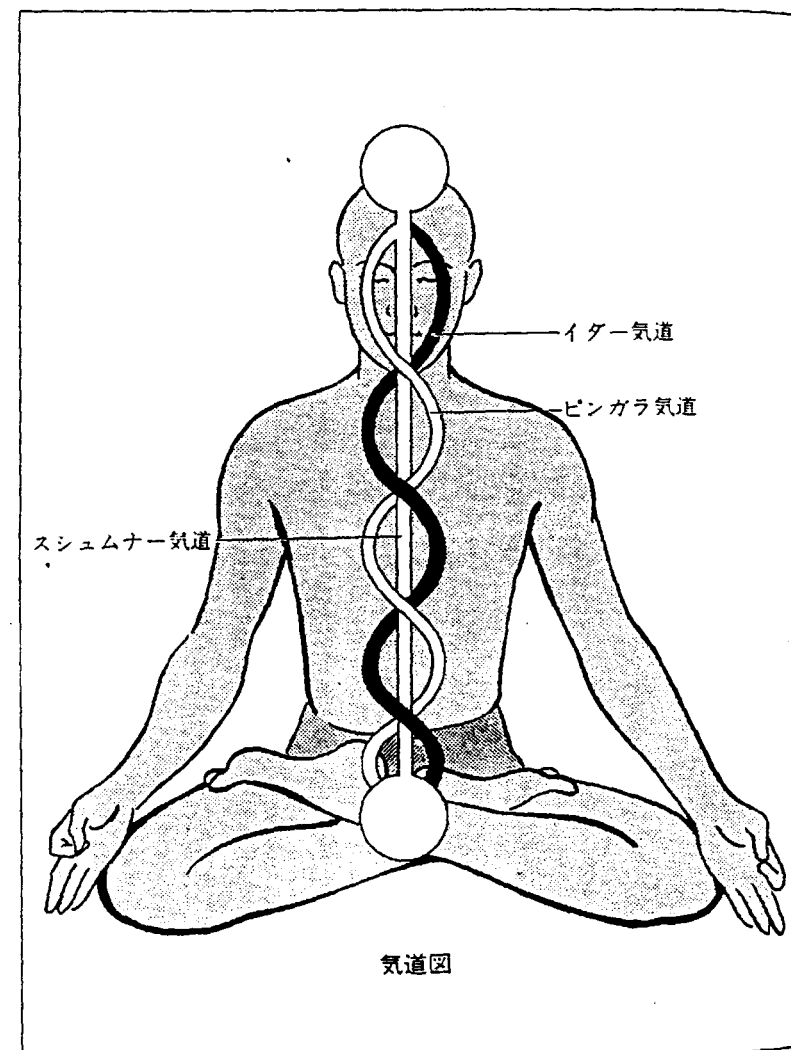
チャクラ図

生死を超える
一九八六年十二月二十五日 初版発行
一九八八年六月十二日 改訂版一刷発行
一九九二年五月二十四日 増補改訂版一刷発行
一九九五年一月十五日 改訂三版一刷発行

著者 真理の御魂 最聖麻原彰晃尊師
発行者 松本 知子
石井 久子
発行所 株式会社 オウム
東京都世田谷区世田谷二一八十七
郵便番号 一五四
電話 〇三(三四三九)六〇四三
振替 東京二一〇九三二五

定価一八〇〇円

© His Holiness the Master, Shoko Asahara 1995
ISBN4-87142-103-1 C0014 P1800E



気道図

註―インターネット状況を論じるのは、オウム情況との同時代性を探るためであった。

オウム教団が科学技術、とくに電子機器を使いこなし、製造／販売までおこなっていたことはよく知られているが、この特性とオウムの信仰や修行の関連はあまり論じられていない。直観的には、宗教性の把握の不充分さの度合だけ科学技術の機能的利用へ没入していったという把握でよいとして、さらに次のような関心が生じてきている。断片的項目として記すと、

・麻原氏の有名になった『生死を超える』には、多くの修行者たちが、より高次の精神的ステージへ到達していく過程が記録されており、特に〈別の自分〉が身体を抜け出して飛翔していく際の視覚的ヴィジョンと各人の幻想性の質の関連に注目した。オウムの科学者たちは、これをコンピュータで解析し、総合し、信仰へ応用したのであるうか。おそらく、修行と技術開発を別個に進めたのではないか。分離と相互依存の限界…。

・もし、統一的に把握する視点があれば、例えば、膨大な情報量と一定の鋭いセンスでオウム論をおこなっている立花隆のインターネット論（「物理的空間」と「情報空間」の分岐が始まっており、後者の加速度的拡大に遅れるな、という指摘）を、はるか以前に、ヒトの生存形態を肯定したままの機械的三元論であると批判し得たであろうし、その位置からの現実への関わりは大きく異なってきたであろう。

・統一的に把握する視点に到達するためには、本来は、前ページの4でのべたような、電子機器に依拠せずに全世界と対決してみる位置を潜ることが不可欠であった。かりに電子機器を用いる場合も、前述の修行体験の基礎となる身体の中を貫流する幻想の管が瞑想やグルの指導（言葉ないし接触）によってどのように機能していくかを測定する媒介として（ないし、測定し得ない場合は、機器自体の限界の測定方法へ交換しつつ）設定するならば、インターネット肯定論が、社会的身体における神経細胞の拡大の肯定に過ぎず、身体的全器官の解放にとっては部分的な意味しかもち得ないことを、言葉以上の説得力で提起し得たはずである。

・極めて乱暴な（暴力的な？）いい方になるが、現段階のインターネットの機能とオウムの修行方法には、大多数者の評価としては肯定と否定に分裂しているとはいえ、共通の欠陥がある。それは、全生命体といわないまでも、ヒトの性別に対応する使用しないし解脱の回路を想定していないことである。このいい方で何かが一瞬に判るヒトに期待する。このレベルで、何かが一瞬に判ることこそ、双方の最終目的の核心にあるはずだ。

・過渡的な結論ではあるが、インターネット概念の解体と再構成の作業は、オウム概念の解体と再構成の作業と対応し平行して展開していく場合に成果を得るのではないか。

上告申立趣意書（被告人）

（前略）

（松下から86年5月10日に提出）

- (一) 公訴棄却を主張する十数年の過程。大学闘争の本質。
- (二) 最高裁判例（水俣病や法税法）のかすかな揺らぎを拡大させる方向。戦後の全司法構造の批判。
- (三) 併合の必然（松下に関する全事件）。その永続性。
- (四) 大学による証拠の留置の現代的意味。
- (五) 一・二審が被告人の主張を審理しえないままの問題群と情況的位相。

六 これらをふまえて一・二審判決の各事実性把握の誤り。

（中略）

さらに重要な

のは、被告人は、現在の一・二・三審の裁判制度による「神戸」大学闘争の審理不可能性を、前記のテーマ群審理の前提として提起していることである。部分的に引用すると、申立人が

「α——二審判決の無罪部分を含め、全ての事実について有罪を証明する証拠を提出し、証言する。

β——公訴されてはいないが、密接に関連する事実について公訴を自明として証拠を提出し、証言する。

γ——申立人の法的利益など問題ではなく、全ての人にとっての真実の追求、申立人の責任の対象化が必要である。

と主張した場合、この主張に対し、最高裁は口頭弁論を開くであろうか。できなければ解体をさらすことになる。」

（申立人は）審問状況を創出し、参加しつつ、あらゆる幻想性構造の関係性の基底を変革しようと試みている。あえていえば、これこそが最大の「罪」であり、裁けるなら、これをこそ裁くべきである。」

前記と同一日付の「五・一〇」付で、松下を含む仮装被告団から、上告審理の前提に関する申立書。

ここでは、趣意書で示唆している審問法廷へ最高裁の参加要請をしており、一ヵ月以内に応答がない場合の忌避を予告している。

「六月二日」 忌避申立書

六月十九日 却下決定

（第一小法廷）

「六月二日」 異議申立書

前記決定の立証なき理由づけを批判しつつ、もし例外的に、最高裁が、カフカの「訴訟」に関するドゥルーズとガタリの批評をよんでいて、訴訟の三つのケース（①決定的な無罪 ②外見上の無罪 ③無期限の引き延ばし）の分析を、現情況で最もよく生き、かつ、生かしているのが申立人であると批判しているのであれば、少し話はちがってくるが……と審問の場への風穴をあけている。

七月一日 何かに焦ったのか早々と棄却決定

「七月四日」 求釈明かつ再審の申立

六・一九却下と七・一棄却の語法的矛盾から、全申立への対処の矛盾を開示しつつ、全決定を転倒している。もはや、決定など無効な審問法廷へ出立しつつ。

ドゥルーズへの非追悼的追悼

95年11月12日のイスラエルのラビン首相暗殺のニュースは無理にでも歴史をある破局へ演出していかうとする何かの意思を感じて戦慄的であるが、私には、その直前の95年11月4日にアパートの7階の窓から飛び下りて自殺したという短い新聞記事が対等に衝撃で、その後の報道や特集にも注目してきたけれども、依然として死の原因、態様、意味などについて納得できる記述に出会っていない。

70才のドゥルーズが自然死を拒否して選んだ自死については、すでに〈概念集への索引と註〉の刊行委による討論断片の中でふれているけれども、討論の流れの中でかすめたに過ぎないので、ここでは、もう少し具体的な表現の位相でドゥルーズに迫ってみたい。

誇るべきことではないが、私はドゥルーズに限らず、内外の思想家といわれる人々の著作の綿密な読者ではない。しかし、そのような私でさえ、ある時期にかれの著作を引用したという経過を示しておく、

神戸大学闘争の上告に関連してドゥルーズ／ガタリによるカフカ『訴訟』論を援用したので、関連表現をこのページ右に転載しておくが、これは必然的な引用というよりは、おそらく無視してくるであろう最高裁への提起に際して、既成の裁判用語やイメージを変化させつつ、自分と相手の表現位相に風穴をあけることを意図していた。最高裁が無視しようとも、この試みの意味は作成／提出過程において確実な手応えとして感じられたし、その後の様々の裁判過程を見る場合に役立ってきている。

現在のオウム裁判に交差させてみると、オウムの事件は前記のカフカ論に出てくる概念としての「欲求の隣接性」ないし「権力の隣接性」によって分析したり主張したりすることから最も遠い位置にあるという印象を避けられない。関連するカフカ論の一部を次のページ右に転載するが、カフカの『訴訟』におけるような時間・空間の無限性や猶予性はオウムの事件に関しては全くといってよい程に適用不可能である。しかし、その対極性を踏まえて応用する場合には、意外な突破方向が出現するのではないか。すなわち、オウム事件について垂直に重層して迫ってくる、対処不可能に見える拘束状況を転倒して水平な次元へ交換し、オウムを審理する国家も、事件を引き起こした宗教も、非難と断罪を合唱する大衆も、くも全て迷路の中での無数の部屋の一つとして把握し直しつつ、それら総体の地図を作成し、突破をめざすこと……。その過程における無限の問題との格闘が決意されるならば、それは確実に私たち仮装被告団と共闘する方向である。その意味からも、ドゥルーズには、死なずに〈国際法廷〉への過渡にあるオウム裁判を見続けていてほしかった。

前述したドゥルーズらの裁判論の他にも私たちが注目しているのは、ドゥルーズ／ガタリの別の共著『カフカ―マイナー文学のために』である。その中心テーマとしての「ヘイナ―」概念の転倒は印象的で、著者たちは、「偉大な文学」より下位にあると評価されが

(前略)

カフカにおいては、いたるところで、「訴訟」でも「法の問題について」でも、法は注釈者のさまざまな〈党派〉〔立場〕との関係で考えられている。しかし、政治的には、重要なことはいつでも会議場の廊下とか集会の舞台裏といった別のところで起こる。そのような場所では、ひとびとは欲求と権力との内在的な本当の問題——〈司法〉の実際的な問題——に直面するのである。

したがって、法の超越性という考え方をきっぱりと捨てなくてはならない。もしも最終審が到達されえないもの、表象されえないものであるとするならば、それは否定神学に固有の、無限のヒエラルヒーという考え方によるのではなく、欲求の隣接性によってである。この欲求の隣接性によって、事象はいつでも、隣りの事務室で起こるようになる。事務室の隣接性、権力の分節性が、零級のヒエラルヒーと権力者の卓越性とのかわりになる。(すでにあの城は、分節され隣接した田舎家の寄せ集めであることが明らかにされた。これは、ハープスブルクの官僚組織や、オーストリア帝国のなかの諸国のモザイクに似ている)もしも聖職者から小さな娘たちまでのすべてのひとが司法に属し、司法の付属品であるとすれば、それは法の超越性によってではなく、欲求の内在性によってである。

(中略)

司法とは、可動的でいつでも位置が動く境界線を持った、欲求のこの連続体である。

画家のティトレリが、無期限の引き延ばしの名のもとに分析するのは、このプロセス、この連続体、この内在性の領域である。これは「訴訟」の決定的なテキストであり、そしてティトレリを特殊な人物にしているテキストである。彼は原理的に可能な三つのケースを区別している。すなわち、(1)決定的な無罪 (2)外見上の無罪 (3)無期限の引き延ばしである。

(中略)

もしもKが外見上の無罪を拒絶するとすれば、それは本当の無罪を希望してのことではなく、またそれ自体を自分で養おうとする罪の内面的な絶望においてでもない。なぜなら罪は、すべて外見上の無罪の側にあるからである。外見上の無罪については、それが同時に無限であり、限界があり、非連続であることができる。

(後略)

〈叢書・ユニベルシタス〉

カフカ——マイナー文学のために

1978年7月10日 初版第1刷発行

1985年9月30日 第7刷発行

G. ドゥルーズ／F. ガタリ

宇波 彰／岩田行一訳

発行所 財団法人 法政大学出版局

ちな「マイナーな文学」について次のように要約しうる重要な指摘をしている。

・マイナーな文学はチェコのユダヤ人カフカがドイツ語で表現したように、またアイルランドのジョイスが英語で表現したように、少数民族が自己を取り巻く多数民族の言語を用いて創造する文学であり、その特性は、

①書くことも書かないことも不可能性にさらされている。

②個々の事件やテーマが受入れられる安定した社会的基盤を持たないために、意思しうとしまいと直ちに政治的な性格を帯びてしまう。

③小集団として表現していくことを強いられる。

そして、これらの条件と格闘して普遍へ到達している意味において、「偉大で、革命的なのは、マイナーなものだけである。」と、世界情況の様々の場で孤立の中で苦闘している者を励ましてくれる結論を導いている。オウム教団、特に麻原氏についても、この意味でのマイナー性からの評価をしていく方が本質的であろう。

前記のカフカ論は共著であり、ドゥルーズだけの著書ではない。しかし、私は、このような共著の形態や、84年6月にエイズで死去した同時代の哲学者について86年6月に出した『フリーコー論』にこそ、単独で書いたものの、自分について書いたものよりも鮮やかにドゥルーズの本質が開示されていると考える。そこに、唯一の偉大さと革命性の指標を付与しつつ交換した「マイナー」性へ結合しようとする決意を読み取ることが可能であり、いくつかの主著も、この視点から把握する時にこそ同時代性の核心を見せるであろう。フリーコー論（フリーコーは生前にあるインタビューで「20世紀はドゥルーズの時代と呼ばれるようになるだろう。」と語っている。）から私がインパクトを受けた表現をここに引用し構成してみると、

- ・「力はいつも外から、どんな外部性の形態よりも遠くにある一つの外からやってくる。」
- ・「フリーコーは、斜線的次元とよぶことのできる新しい次元を作り出した。いわば、それはもはや面ではなくまさに空間に、点や塊や形態を配分することである。」
- ・「（権力を構成する力の表出ないし地図としての）ダイアグラムは、連結する数々の点の傍らに、比較的自由で、解放たれている点、創造や、変動や、抵抗の点を必ずもっている。…一九六八年は、何と興味深い線のねじれであったことか。」
- ・「総体性とは、ある試みから次の試みへのレベルを移動させる力のことである。」

（いずれも宇野邦一訳による。）

それぞれ、私が自死せずに生きていく力とひらめきを与えてくれる。そのような位置にあるかれ自身は、なぜ墜落死（飛び下り自殺ではなく、窓枠にしばらくぶら下がってから手を放して落下したのだという確信があるのだが）したのであるうか。ドゥルーズの死によって、真先に連想したのは、かれ自身もカフカ論で論及している『判決論』の最後の場面であった。（関連するカフカの表現を、次のページ右に転載する。）ドゥルーズにとっ

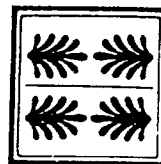
(前略)

「じゃおとうさんはずっとぼくのことをスパイしていたのですね！」とゲオルクが叫んだ。憐愍の表情と共に父親は吐き出すようにつけ加えた。「おまえはもつと前にそう言うべきだったよ。今となってはちとおそすぎるわい。」

それから大声になって、「これでおまえもわかったろう、おまえ以外にも存在するもののが。これまではおまえはただおまえのことしかわからなかったんだ！ むじやきな子どもだったわけさ、おまえはもともと。だが、もつと本当を言えば、おまえという奴は悪魔のような人間じゃ！——だから聞くがよい、わしは今おまえに水死刑を宣告する！」

ゲオルクは部屋から追い出されたのを感じた。父親が彼の背後でどすんとベッドの上に倒れる音を、彼はまだ耳に入れたまま逃げ出した。段がまるで斜めの板でできているように彼が迂りおりて行った階段の途中で、彼は夜のあと片づけに上の住居にあがって行くこうとしていた彼の家政婦を突きころがした。「ひゃー、お助け！」と彼女は叫んで、前かけで顔をかくした。だがもう彼は向こうに行っていた。門からとび出すと、車道を越えてまっすぐ水の方へ引きつけられていった。もう彼は飢えた者が食物をつかむように欄干をつかんだ。少年時代両親の自慢のたねだった優秀な体操選手として、彼はひらりと身をおどらせた。まだ彼は次第に弱っていく両手でつかまりながら、欄干の棒のすき間から一台のバスが通りがかるのをうかがい見た。その音は彼が落ち込む音を容易に消し去ることだろう。そうして彼は小声で叫ぶように言った。「おとうさんおかあさん、でもぼくはあなたがたをいつも変わらず愛していました。」それから彼は手をはなした。

この瞬間、橋の上をほとんど数限りない車の列が行き交^かっていた。



講談社文庫

変身・判決・断食芸人ほか二編

カフカ 高安国世訳

昭和46年7月1日第1刷発行

昭和55年6月30日第10刷発行

での〈判決〉は何であったのか判らないまま他の作業をしている過程でいなづまのようにかれのいう「68年の興味深い線のねじれ」のヴィジョンに照らし出される瞬間があった。すでに概念集7の〈無力感からの出立〉で論じたが、69年7月に封鎖解除のためのセレモニーとして大学側が機動隊の演習場で開いた「全学集会」を批判する行動をした学生（という概念規定を超えている名づけ難い存在）たちは機動隊に断崖から追い落とされた。辛うじて岩にしがみつき宙吊られている一人の写真を掲載したが、その名は不明のままである。その後のバリケード解除／正常化の過程で神戸大学の学生寮の傍の工事現場からの闘争参加者と想定できる人の原因や態様が不明なままの墜落死があったことを聞いた後も私はかれらの名前を知らない、という以上に知ることを無意識的に避けていたといえる。それは、その人も学生という概念規定を超えている名づけ難い存在であると把握し、私自身もそのような死に方と無関係ではないと直観していたためでもあるが。しかし、その人やまだ私の知らない領域に生じた可能性のあるその段階の死者たちの〈宙吊り〉や〈墜落〉の瞬間に69年の断崖の光景が脳裏をかすめたことを私は疑わない。

私はドゥルーズについて今このように記すことを通じて、69年の無名の学生（という概念規定を超えている名づけ難い存在）たちへの追悼と再生への提起をしておきたい。ドゥルーズの死の原因、態様、意味などについては殆ど判らないとしても、このような想起をさせてくれた〈フィルムの逆転性〉の感触は確かであり、それはドゥルーズへの追悼と全く無縁ではないはずである。かれも現代の権力の精緻に張り巡らされたダイヤグラムとの格闘に疲れ、追い詰められ、追い落とされ、しばらく窓枠にしがみついた後に落下したといえるのであるから。（それは、生きる目標を失った青年たちによって大阪の中心部を流れる汚染された川に投げ込まれて死亡したホームレスのヴィジョンとも重なる。）

先述した〈フィルムの逆転性〉を、69年以降の無名の死者たちが落下した断崖を、落下の逆過程を実現しつつ舞い上がり、私たちへ未踏の方向を指し示してくれる夢として見始める視点が不可欠であり、それをあらゆる死者たちについて現在／未来的な方法として追求し始める作業が要請されているのであり、それをドゥルーズの死は示唆し得ていることに私は気付いている。

註1ー 88年にエイズで死去したフーコーと共に、ドゥルーズの死に方の異様さと孤立性にはヨーロッパの現代思想の姿が象徴されており、また、病床であえぐフーコーや路面にたたきつけられたドゥルーズが無名の身体として扱われたであろう経過は、95年の地震やサリンによる無差別死を対極に連想させ、それらにはさまれた膨大な死と向き合っ

て私たちの地獄篇の描写と地獄との闘いを持続していく意思をかき立ててくれる。

2ー 〈概念集への索引と註〉に掲載した刊行委の討論断片で、ドゥルーズの死を〈自己を含む状況を重力へ委託する形で処刑したのではないか〉と指摘しているので参照していただきたい。

96年4月4日 朝日新聞

米の連続爆弾犯「ユナボマー」

容疑の元大学助教授を拘束

FBI

【ロサンゼルス3日11水 本和電】一九七八年から九五年まで、米国内で計十六件の小包爆弾事件を引き起こし、三人を殺害、二十三人を負傷させた連続爆弾事件の容疑者と見られる男が三日午後、モンタナ州リンカーン郊外にある自宅の山荘で連邦捜査局(FBI)に身柄を拘束された。新聞

社に脅迫状を送りつけて自分の論文を掲載させるなど、異例の行動が目立ち、「ユナボマー」と呼ばれていた。拘束されたのは、シカゴ生まれのテオドル・カチンスキー元大学助教授(五三)。ハイテク社会を批判した論文内容などから、現代社会への不満が根底にあったと見られる。FBIは容疑者が住んでいた山荘などを家宅捜索している。名門ハーバード大学を卒業後、六七年から一年間、カリフォルニア大学バークリー校で助教授として数学を教えていたが、その後は職をかえて各地を転々とした後、山荘に一人で住んでいたという。

「ユナボマー」連続爆弾事件、容疑者はナゾの元助教授**

HELENA, Montana (Reuter)—A former university mathematics professor suspected of being the notorious Unabomber was charged with a federal weapons violation on April 4 after FBI agents found a partially assembled bomb in his remote Montana cabin.

When 53-year-old Theodore Kaczynski made his first appearance in a

Helena courtroom, prosecutors made no mention of the string of Unabomber attacks that killed three people and maimed 23 others from 1978 to 1995.

Kaczynski was taken into custody after being identified as a suspect by members of his own family. The bearded suspect—a reputed mathematical genius who has lived like a recluse in his

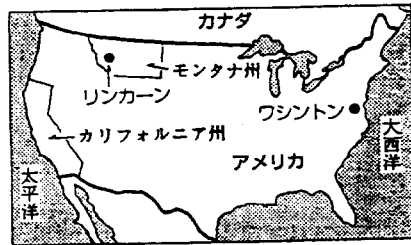
rustic cabin since the 1970s—appeared slightly dazed.

Born in 1942 in Chicago, Kaczynski graduated from Harvard University at the age of 20. He was an assistant professor of mathematics at the University of California at Berkeley from 1967 before resigning in 1969. From then on, his past is shrouded in mystery.

【ユナボマー】

・Unabomber 主に大学(university)と空港(airport)の関係者を狙った爆弾犯(bomber)の通称
・partially...bomb 作りかけの爆弾
・made...of ~についてなにも言及しなかった
・string of 一連の
・maim(ed) 傷つける、負傷させる
・taken...custody 身柄を拘束された
・bearded あごひげをはやした

・recluse いんとん者、世捨て人
・rustic cabin いなかの小屋
・dazed ぼうっとした状態
・shrouded...mystery なぞに包まれている



掲載要求の論文

96年4月6日

朝日新聞

読んだ弟が通報

論文はカチンスキー容疑者逮捕のきっかけにもなった。掲載された論文を読んだニューヨーク州在住の同容疑者の弟が、昨年暮れ、兄が一九七〇年代に新聞社に出した手紙のコピーを発見。技術の乱用を批判するその内容が驚くほど似ていることに気づき、今年初め、弁護士を通じてFBIに連絡した。

「ユナボマー」には百万ドル(一億円余)の懸賞金がかかっており、米各紙は「有罪が確定した場合、弟が支払いを受ける可能性はある」と報じた。

昨年、論文を掲載した際、タイムズとポストは「言論の独立を放棄するのかわ」という批判を浴びた。今回の逮捕に関して、タイムズは「掲載は明らかに(捜査)進展の大きな原因となった」と記事の中で評価した。

(前略)

(前略)

96年4月6日・夕刊

朝日新聞

車が足代わりのこの町で、移動の手段は徒歩か自転車。郵便配達人の車に便乗することもあった。同容疑者はおれに毎春秋、自分で育てた野菜を配達人の家に届けた。

ただで本を読める町の図書館には熱心に通っていた。館員はわざわざ、カチンスキー容疑者のために新聞や有名科学雑誌を保存していた。同容疑者は、古い文芸書を原書で読み、原書がないと取り寄せるように求めた、という。

(後略)

ユナボマーの孤独な闘い

概念集・別冊1の21ページ右の掲載資料に関連するアメリカの爆弾闘争実行者の容疑でテオドア・カジンスキー氏が4月3日にロッキーマウンテンの小屋で逮捕された。

95年8月にニューヨーク・タイムズとワシントン・ポストが要約を掲載した論文「工業化社会とその未来」については、簡単な報道記事のいくつかと、太田竜氏が刊行している情報誌「マントラ」95年11月号の紹介と論評（一部を次のページ右に転載）を読んで見た限りでいうと、232項目・三万五千語（前記紙は三千語のみを要約掲載）の主張の基本は次のようなものである。

- ①現代社会の経済的技術的基盤は人間の奴隷化へ向かっており、根底的に批判する。
- ②既成の左翼的運動はこの経済的技術的基盤に依拠し、強化していくから否定する。
- ③工業技術社会の欠陥だけの改良はできず、総体の打倒しか解決方向はない。

報道関係者は爆弾闘争（の脅迫による論文掲載要求）に重点をおいて批判し、論文の内容を論評していず、逆に太田氏は論文の紹介と論評はするが、掲載に至る過程への批評はしていない。この部分性は相互に補完し合っているので、ここでは論文掲載の過程、論文の主張の双方に関して刊行委の見解をのべる。

X-論文掲載の過程について。

・すでに概念集・別冊1の21ページ右で、特に日本のマスコミが示している反発の仕方を批判した。日本のマスコミは、脅迫による論文掲載要求に対して異和が強いようであるが、記事によれば、論文の掲載は捜査当局の指示によっておこなわれ、おそらく発想や文体を手掛かりとして執筆者へ爆弾闘争実行者さがしの媒介とされた。それが逮捕の契機になったという意味においては、日本のマスコミは、反発と逆の反応をしてもよいのである。むしろ、今後出現するであろう闘争主体にとってこそ、より本質的・本格的な試みに際しての教訓であるといいたい。

・マスコミに限らず、大多数の人々にとって爆弾闘争とか脅迫というイメージは、論議の余地なく否定すべきものとしてあるが、そのような先入観をいったん取り払って、無視されている少数者の意見に耳を傾ける姿勢の欠如が、そのような「過激な」方法をとらせていることを内省する方がよい。「過激」と思われている人は皆、本当は心やさしいのである。時として、やさし過ぎるために「過激」に見えるに過ぎない。

・今回の場合は、少数者の過激な意見というよりも、「工業化社会とその未来」という、世界的に関心と共感を呼ぶ意見であり、このような論文掲載要求がなされるまで同水準の論文を掲載し論議することのなかった科学者、政治家らの責任は大きい。逮捕されたとはいえ、この闘争主体は掲載の意図を達成し、世界的に問題提起し得たといえる。

・しかし、これまでの部分的な資料からの判断ではあるが、あえて限界を指摘すると、既成の科学技術による爆弾の製造、郵便制度や新聞の利用という行為は、既成の科学技

ユナボンバー論文 「工業社会とその未来」 紹介と論評（その八）

一、
* 「ユナボンバー」とは、米國FBIなど、捜査當局が付けた通稱であつて、論文の筆者は、FC、と自稱して居る。
「EIR」誌、「ニュー・フェデラリスト」紙によれば、「ユナボンバー」は、英國王室、島のクラブ、閣の世界権力が動かすエコロジー・テロリスト軍團の一つ、とされて居る。
特に、「地球第一！」と、密接な關係がありさうだ。

二、
最近、「地球第一！」は、純然たる地下秘密テロ組織「地球解放戦線」との、ある種の分業體制を作つたと報道される。この「地球解放戦線」は、ドイツなど、ヨーロッパに根を張り始めたもののやうだ。

三、
「EIR」一九九五年十月二十日號に、ライアル・ワトソンの新著、「暗黒の自然」の書評（「英國の著述

家が、食人、殺人を、「エコロジー」のために良いこととして持ち上げる」が掲載されて居る。
ライアル・ワトソンはエコロジスト作家として著名で、彼の著作は、日本語でも出版されて居る。
この書評（三頁）は、日本の有志に紹介される必要ありと認められる。
ワトソンの著作が、「ユナボンバー」と、同一陣營に位置することは自明であらう。

四、

一九九五年、ロンドン、Hodder & Stoughton

* ニニバーシティー大學とボンバー爆弾とを結び付けた語
英語では、ユナボマー、と發音され、日本の報道機關もそのやうに表記して居るが、我々は、爆弾 bomber と發音語をはっきりさせるために、敢えて、ユナボンバー、と表記する。

「ユナボンバー」論文の眼目は、
自然が技術か、
と言ふ、二者擇一の枠組を設定するところに存在する。
自然は善、
技術は惡、
故に技術を破壊することは善であり、正義である、
と言ふのである。

五、
「ユナボンバー」が、技術破壊の「世界革命」の戰略決定に當たつて、フランス革命とロシア革命の前列に舉ぶ、として居るところは大變興味深い。
何故なら、我々は既に、この二つの「革命」が、いずれも、英國（三百人委員會）によつて演出されたことを知つて居るからである。

六、
技術が惡、と言ふことは、人工が惡、と言ふことであらう。
しかし、人間は人工と共に生まれた。従つて、人工が惡、とは、人類の存在そのものが惡、を意味することに成る。我々は、この種の主張が、英國のフイ

リップ殿下によつて公表されて居ることを承知して居る。
「ユナボンバー」論文は、こうしたところまで言及して居るわけではないが、

七、
この「論文」で、もう一つ、注意を引かれるところは、それが、「左翼主義」を徹底的に攻撃して居るのは何故か、その意味、である。
「ユナボンバー」が推奨して居るフランス革命とロシア革命をやつてのけた（ブルボン王朝とロマノフ王朝の破壊に成功した）のは、他ならぬ、「左翼主義者」ではなかつたのか。

ここでの「左翼主義」には、フェミニズム、ゲイの權利擁護、その他の、いわゆる差別反對運動などが含まれる。
工業技術社會打倒の世界革命のために、
「左翼」は有害である、
と言ふ。

詰まるところ、「左翼」は、「彼等」にとつて御用済みである。
これに、「スクラップ・アンド・ビルド」方式で對處する、と言ふのであらう。
左翼は廃棄處分とし、使へるものは再教育して使つてやらう、
との「思ひ召し」のやうだ。

八、

「人工」が問題の中心である。
我々は、人類の誕生以來、「人工」には二つの系統があることを知つて居る。
第一は、エントロピー減少志向の人工である。

第二は、エントロピー増大志向の人工である。
エントロピーとは、十九世紀の歐米自然科學（熱力學）の中から作られた用語で、世間一般では使はれない。

自然界の中で、秩序が崩壊して無秩序化して行く傾向を測る數量、と言つた意味であらう。

従つて、エントロピーを減少させる人工物は、自然界の、無秩序から秩序が生まれて来る傾向を促進し、増強するが如く働くのである。

エントロピー増大志向の人工物はその逆である。

「ユナボンバー」論文が云々して居る「技術」は、第二の傾向の所産である。
我々は既に、この論點については十分に論旨を展開済みだ。

（了）

術や制度を否定する立場との関連を説得的に提起しつつ実行されたとはいいい難い。

・論文掲載後に家族(弟)の賞金ほしさ?の密告によって逮捕されたのは残念であるが、これは自己史的な関係への対処の仕方に欠損があったことを暗示しているように思う。

Yー論文の主張について。

・カジンスキー氏が論文の執筆主体であるのかどうか、一連の事件を実行したのかどうかは、氏の発言としては確認できていないけれども、氏がこの論文を書いたと仮定しておくと、報道による生活様式からは、ロッキー山脈の中の小屋に一人で無職のまま生活しつつ、時々数キロ離れた町の図書館で読書し、往還手段は徒歩か自転車、郵便配達車に乗せてもらったお礼に自分で作った野菜を渡すという姿が想像できて、好感を持っている。しかし、この感触が論文からは殆ど伝わってこない。それは、論文の執筆者であることが他の人や権力機構に知られる可能性を少なくするという意味ではプラスであるとしても、それ以上の問題として指摘すると、

・氏は技術社会の対抗概念として自然を想定しているのであるが、対置の仕方、それぞれの内容規定がやや機械的に過ぎる。自然以上の自然を作り出しうる技術、その技術をどのように、だれが作りだすかという問題が設定されていない。人間の生理や幻想過程を自然として把握し分析する視点も論文(の要約)からは読み取れない。

・氏は60年代末以降の世界的な大学闘争をカリフォルニア大学バークレー校で体験しているようであるが、体験のストレートな記述は無理であるとしても、世界的に共通する大学の矛盾、左翼運動の限界を実感と普遍性を込めて提起することは不可能ではないはずであるのに、論文(の要約)からは読み取れない。

・論文の主張の基本として要約した前記の①、②、③は、それ自体としては共感できるといってよいとしても、氏が今後の革命のヴィジョンをフランス革命やロシア革命への肯定的言及のレベルで提起しているのは同意しがたい。未踏の「革命」のヴィジョンと方法が求められているのであり、私たちがそれを追求しているのであるが…。

アメリカの国家権力は、オウムに対すると同様に、氏に対しても死刑を自明とする報復裁判をおこなうであろうが、それに対してもオウム裁判批判で提起した視点が適用できるし、していくべき必然にある。オウム裁判において、被告人と弁護人側から言及する形でのみ可能であろうが、アメリカのユナボマーの提起した同時代的問題との共同審理を提起したい。これが真の国際法廷の出現への接近の条件の一つであることはいうまでもない。

なお、ユナボマーについて紹介し論評した太田竜氏の「ヘマイナス・エントロピー」の提起は共感できるけれども、かれを「闇の世界権力が動かすエコロジー・テロリスト軍団」に属するという反ユダヤ活動家らの評価を肯定的に紹介しているのは肯定できない。カジンスキー氏の孤独な闘いの質を止揚しうるような「孤独な闘い」が世界的な規模で私たちがそれぞれに求められており、カジンスキー氏は、その動きの無意識的集合の象徴なのだ。

あとがき

序文の註が、あとがき以上の「あとがき」になっているけれども、別の記述をすると、概念集シリーズ1〜12を批評の基軸とする方法からの連続性（x）と移動性（y）の違いをつきとめたい、と作業中に考えた。そして、次第に気付いているのは、

（x）を意識しないで展開してみる場合にも持続している連続性（x）との差が移動性（y）であることである。その視点から別冊1と2を比較して明らかになるのは、

1は、これまでの刊行委の表現過程の必然から概念集シリーズ1〜12のテーマや方法の応用としての「オウム」論を目指したが、

2は、1を成立させている状況に潜在している関係性と対峙しつつ、概念集シリーズ1〜12のテーマや方法を意識せずに表現を開始しており、「オウム」論そのものに収束せずにはみ出していくとしても、どこかで「オウム」論と交差してくる感触が個々の項目ごとの比重の違いは別としても確実にある。かりに、1の「オウム」状況への論じ方を（x）に対応する指標とすると、2における「オウム」状況からの論じ方が（x）であるということができ、へのとからの方向ないし位相の差が（y）の指標になるのであろう。

3以降を構想する場合、1↓2の変移以上に「オウム」論を前提とせずに、あらゆる未踏のテーマへ自在な移動性で関わっていくことになるであろうが、その場合にも、今は気付かないラセン状の軌跡を描く予感があるので、その感触も表紙の副題に込めた。

なお、前記の記述と矛盾するようであるが、この号を含めて96年以降は具体的には何も刊行しない可能性があったし、これからもあり続けていくであろう。それは私の発想や生存形態を根底的に変換しかなない条件がラセン状に拡大しているからであり、私もそれを加速しているからであるが……。具体的な予測は私にもできないけれども、以上をかきとめておく。

一九九六年五月

刊行委 氣付 松下 昇

刊行リスト

内容や刊行過程についての質問・提起などは左記へご連絡下さい。(概念集9や10のへあ
とがき)に記したような不確定状態にありますが、連絡は可能です。)

〒657 神戸市灘区赤松町一の一 松下 昇氣付 刊行委員会

☎とfax 078・821・4984

刊行物の定価はなく、読者の何らかの表現と交換するのが原則です。ただし、共同作業の
ためのカンパは歓迎します。郵便振替口座 01150・3・42929

松下 昇(についての)批評集

α 篇1 (88年10月)、2 (89年6月)、3 (95年6月)、… α系は国家による批評

β 篇1 (87年9月)、1 更新版(94年9月)、2 (88年9月)、2 更新版(94年9月)

3 (94年9月)、4 (94年9月)、… β系はマスコミによる批評

γ 篇1・4 (87年11月・88年3月)、5 (88年11月)、6 (93年9月)、

7 (93年9月)、… γ系は個人による批評

表現集1 (88年8月)、2 (88年12月)、3 (94年4月)、

発言集1 (88年9月)、2 (88年12月)、3 (94年5月)、

神戸大学闘争史―年表と写真集― (89年5月、その後さらに更新中)

神戸大学闘争史―別冊1 (93年4月)、別冊2 (93年4月)、

〔3・24〕証言集・上巻と下巻 (89年12月・90年1月)、

菅谷規矩雄追悼集 (90年10月)、

救援通信最終号 (91年5月)、

へ6・20討論の記録―不確定な断面からの出立― (91年10月)、

正本へドイツ語の本 (77年9月)

五月三日の会通信1・26 (70年7月・81年12月)、訂正リスト (93年5月)

時の楔―へへ語に関する資料集― (78年10月)、時の楔への／からの通信 (87年9月)

時の楔通信第へ0・へ15・へ号 (78年10月・86年7月)、訂正リスト (94年6月)

概念集1 (89年1月)、2 (89年9月)、3 (90年5月)、4 (91年1月)、

5 (91年7月)、6 (92年1月)、7 (92年3月)、8 (92年11月)、

9 (93年11月)、10 (94年3月)、11 (94年12月)、12 (95年3月)、

別冊1―オウム情況論― (95年10月)、別冊2―ラセン情況論― (96年5月)、

序文とあとがきから見た既刊パンフのリスト (93年1月)、2 (95年1月)、

EAST ASIA

作詞・作曲：中島みゆき/編曲：美空一三

降りしきる雨は霞み 地平は空まで
旅人一人歩いてゆく 星をたずねて
どこにでも住む場のように 地を這いながら
誰とでもきっと 合わせて生きてゆくことができる
でも心は誰のもの 心はあの人のもの
大きな力にいつも従わされても
私の心は笑っている

こんな力だけで 心まで折れはしない
くにの名はEAST ASIA 黒い瞳のくに
むずかしくは知らない ただEAST ASIA
くにの名はEAST ASIA 黒い瞳のくに
むずかしくは知らない ただEAST ASIA

モンスーンに抱かれて 柳は揺れる
その枝を揺んだゆりかごで 悲しみ揺らそう
どこにでもゆく柳絮に姿を変えて
どんな大地でも きっと生きてゆくことができる
でも心は揺りゆく 心はあの人のもと
山より高い壁が築きあげられても
柔らかな風は 笑って越えてゆく
力だけで 心まで折れはしない

くにの名はEAST ASIA 黒い瞳のくに
むずかしくは知らない ただEAST ASIA
くにの名はEAST ASIA 黒い瞳のくに
むずかしくは知らない ただEAST ASIA

世界の場所を教える地図は
誰でも 自分が真ん中だと言いたい張る
私のくにをどこかに乗せて 地球は
くすくす笑いながら 回ってゆく
くにの名はEAST ASIA 黒い瞳のくに
むずかしくは知らない ただEAST ASIA



I AM FREE

Lyrics: Mariah Carey

Music: Mariah Carey, Walter Afanasieff

ONCE I WAS A PRISONER
LOST INSIDE MYSELF
WITH THE WORLD SURROUNDING ME
WANDERING THROUGH THE MISERY
BUT NOW I AM FREE...

YOU GAVE ME A BREATH OF LIFE
UNCLOUDED MY EYES
WITH SWEET SERENITY
LIGHTING A RAY OF HOPE FOR ME...
AND NOW I AM FREE...

FREE TO LIVE
FREE TO LAUGH
FREE TO SOAR
FREE TO SHINE
FREE TO GIVE
FREE TO LOVE
FREE ENOUGH TO FLY

ONCE I WAS ALL SO ALONE
UNSTEADY AND COLD
BUT YOUR LOVE RAINED DOWN UPON ME
WASHING AWAY UNCERTAINTY

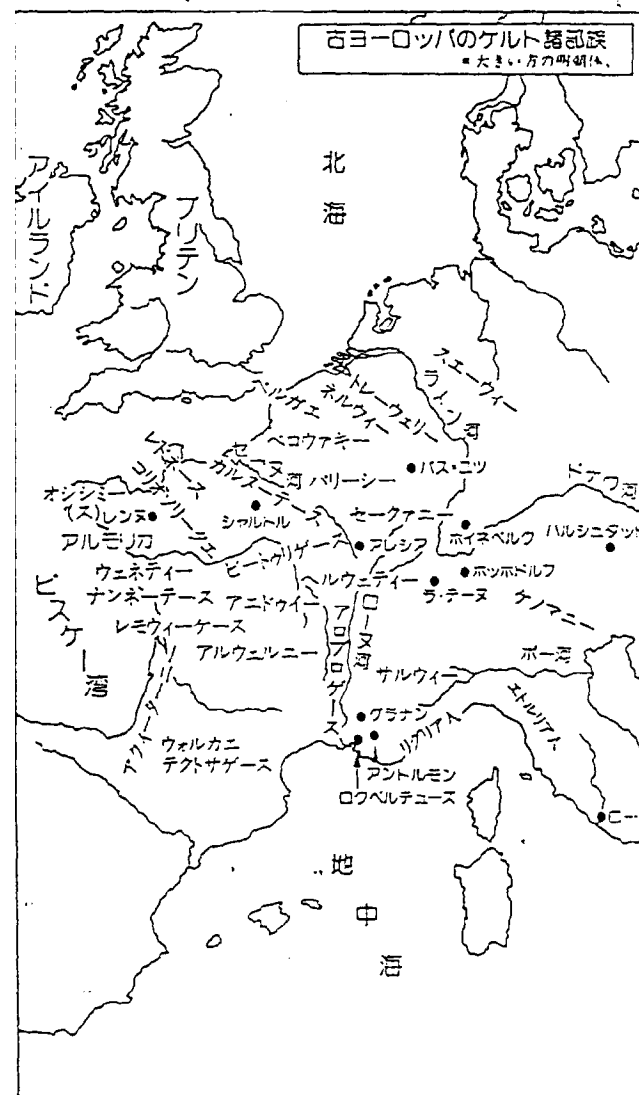
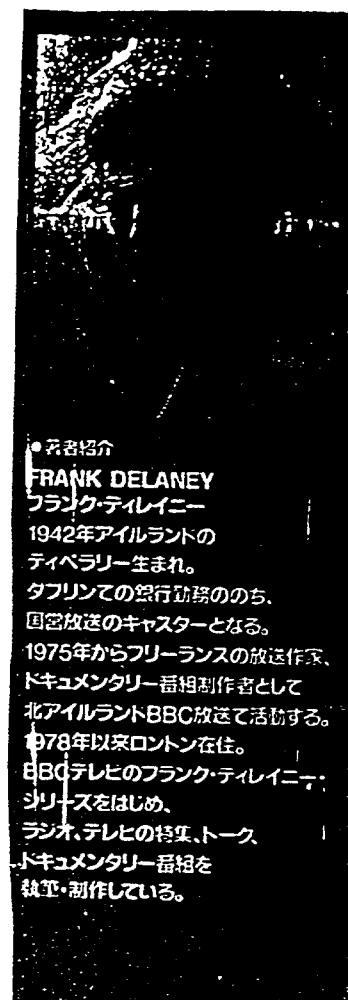
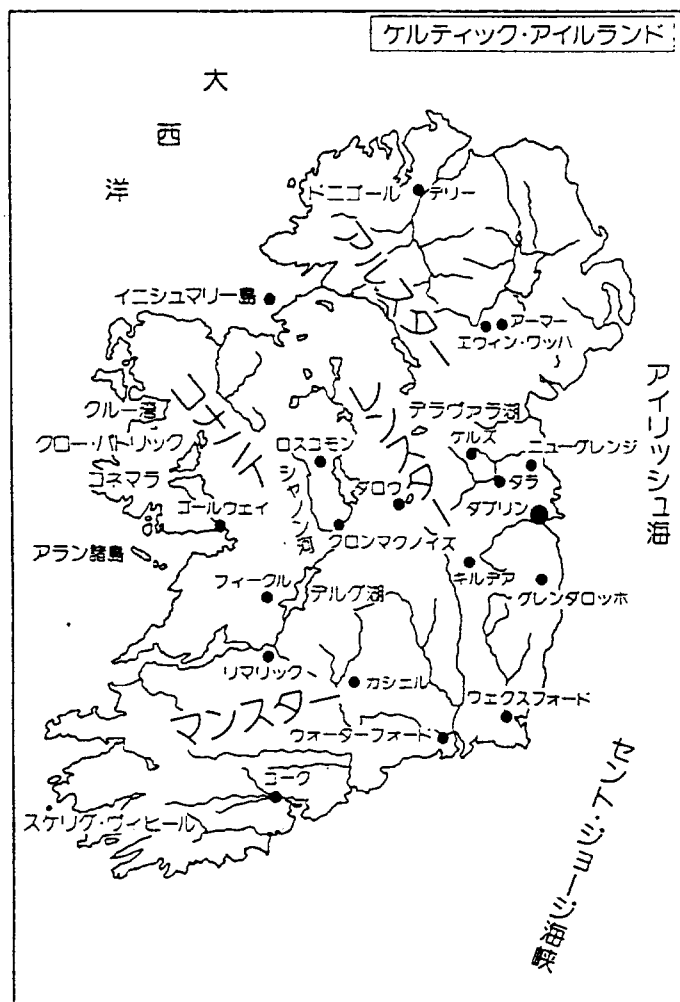
BUT NOW
I AM FREE

*Walter Afanasieff: Keyboards, Synth. Bass, Drum &
Rhythm Programming*

Loris Holland: Hammond B-3 Organ



SRCS7821/STEREO



ケルト——生きている神話

● 著者紹介

1993年3月1日 第1版第1刷発行
1994年2月1日 第1版第4刷発行

監修者 鶴岡真三
著者 森野聡平
発行所 矢部文治
印刷所 岩田印刷株式会社

発行所 創元社

(〒530) 大阪市北区西天満1-4-12
TEL 06-363-3331

ラセン状の声・仮装複合の声・時代の声

マライア・キャリー（70年、アメリカ生まれ）

一本の茎ないし枝のように差し出される声が既成の歌の基本であると仮定すると、かの女の声は一本の茎ないし枝をうねり這い昇ってくる蔓のような迫力があり、超高度の音程を自在に往還できる才能によって一層その効果が増幅されている。歌詞からはみ出す呼吸音や付加音（オオとかアアなど）も歌詞に対応する声と対等の比重がある。かの女は勿論商業ベースで売りに出され、それ故に私のような者の耳にも届いているのであるが、その上でいうと、かの女の声の特性は、歌手として認められるまでの前史に影を落としているであろう混血Ⅱ仮装複合への差別（父はベネズエラ系、母はアイルランド系）をはね返しつつ、歌に潜在する可能性を取り出す喜びを共有させる力のために、意外な示唆を与えてくれる。例えば、既成の概念をラセン状にたどり再構成する試みへのインパクトとして。かの女の場合には、定式化した歌い方を超えることの素晴らしさを示した《クリスマス》シリーズの諸曲（94年）に声の特性が、自分で作詩・作曲した《デイ・ドリーム》シリーズ（95年）の特にヘイツ・フリーに歌手としての、また歌という形式の自由な本質が最もよく示されている。ただ、不可避的な経過であろうが、この感覚の根源を聴こうとせずに、自己の安定した（？）生活の刺激剤として扱う人々が増加しているので、そういう人たちは無視して着実な生活を選んでほしいが、それをかの女に望むよりは、私たち自身の聴き方を変革しつつヘマライヤを聴くべきなのであろう。

エンヤ・ニ・ブレナン（62年、アイルランド生まれ）

ケルトの音乐的・文明的遺伝子を復活させている、かの女の歌は、ケルトの民を駆逐して支配的となったローマ・ゲルマン的ヨーロッパを軸として発展してきた現在の文明に疑問をもつ人々にとって、情況的な意味を持っているが、それに対応して重要なことは、かの女が今もアイルランドの暗鬱な海岸近くに住み続け、作曲・演奏・歌の全過程に仮装的に関わっていることである。何重もの孤独からつくり出した、自分の声や楽器演奏をテープにとる作業を繰り返しつつ、ラセン状に重ね合わせ、複合していく方法……。これは、六甲空間で表現と刊行を持続してきている私にとって示唆的という以上の励ましである。曲として何がよいと思うか、と十代の人々から質問された時、私は、英語の歌詞のついたものよりは、《ケルツ》シリーズ（92年）や《ウォーター・マーク》シリーズ（88年）のケルト語の歌、ハミングだけの曲、楽器だけの曲が最もいいとのべ、エンヤを聴く人がどの曲に魅きつけられるかで、その人の現在の位置が照らし出される、と付け加えた。来日をファンの代弁者のフリをして強要する日本のコマーシャルリズムへの批判も。本当のファンや本当にかの女の表現を生かし応用しようとしている人々は、かの女の表現の根柢と無縁な来日など必要としない。かの女には世界的な人気とは無関係に（しかし、アイルランドの内戦を凝視しつつ）、断崖の傍で何かを小声で歌っているのがふさわしい。

中島みゆき（52年、帯広生まれ）

アメリカ・ヨーロッパとは遠いアジアから前記の二人を把握すると、それぞれの、またみゆき自身の位置がより明確に視えてくる、いや、聴こえてくる。註のように記すと、

・作詩・作曲・ギター演奏・歌唱の全過程に関わる出発をしているために、広く知られていく段階で音楽の商業システムや楽器・技術・複数の声を媒介する他者との共同作業がもたらす仮装複合感覚を深く身に引き受け、かつ逆用もしてきている。従って、前記の二人の音楽の理解や、それ以外の多くの試みにとって役立つ。

・ある歌が国境を超えて、原曲の言語がただちには理解できない範囲へ広がる場合の問題としていうと、みゆきは、明確に日本の国境を超える民衆の歌をめざしており、それは「EAST ASIA」（92年）で、ひそやかな反権力性の姿勢でラセン状に繰り返される「く」の名は EAST ASIA 黒い瞳のく

むずかしくは知らない ただ EAST ASIA」という歌詞や、アジアのモンスーン地帯の音感を想起させるメロディーからも示されている。実際に東アジアでのコンサートもおこなわれてきているが、かの女の歌は、かりに日本の国境内で聴く場合にも東アジアの歌として聴き直す段階に來ているのではないか。

・マライアは全ての歌を英語で、かつ驚くべき質と幅の声で歌うから殆ど目立たないが、対比的にエンヤの本質的なものがケルト語ないし楽器で表現されていることに注目するならば、東アジアの人々がみゆきの歌の意味を日本語としては殆ど理解しないまま聴く場合の感覚へ接近しやすくなる。それは私たちのように日本語を理解する者にとって把握が困難であったみゆきの本質を示唆してくれるかも知れない。これは、マライアやエンヤが歌う言葉を理解できる人々にもいっておきたいことである。

・ただ、ここまでのべたことを提起を実現していくのは容易ではないと直観する。東アジアでのコンサートの曲名を正確には把握していないが、例えば89年後の暗い時期に出現した「時代」（75年）等は含まれていないであろうし、それらのCDやテープも殆ど売れていないはずである。これらの曲が東アジアで心をこめて聴かれるようになるまでには、東アジアの社会的・文明的段階が日本の89年に対応する瞬間を潜り、その後の困難さを味わうことを必要条件とするから。

・この直観は、東アジアが発展途上の遅れにあるのではなく、逆に日本こそが、89年を通過した後、東アジアのどの地域よりも89年から後退しているという判断に基づいている。むしろ、このような聴き方を再びラセン状に実現する位置にあるのは、私たち自身なのである。この遅れの転倒を私たちは音楽だけでなく様々の領域で持続して、（日本の国境内を含む）東アジアの人々と一緒に、みゆきやマライアやエンヤの歌の向こうにあるものを聴き取り、まだ出現していない「時代」の歌をつくり出し、歌い始たい。

註

1―この項目で言及した歌（「IT'S FREE」・「THE MEMORY OF TREES」および

「EAST ASIA」）の三曲をテープ録音したものを準備しているので、聴いてみたい

方はご連絡下さい。テープ録音はもちろんへ無断ですが、その意味は機会をつくりつつかの女たちへ伝えていきます。きっと同意するでしょう。

2―この項目は、もともとオウム教団の音楽について、高次の境地への移行に役立つアストラル音楽のテープが約20種類あることを知ったので、女性の声による歌のテープがあれば、それを媒介して何かを論じるつもりで構想していた。しかし、テープを申し込む際に確認すると、麻原尊師が瞑想中に啓示を受けて作曲したものと、器楽演奏によるものだけで、女性の声による歌のテープはない、とのことであった。ここにはオウム教団における女性の位置づけ（従属化、手段化）が反映しているといってもよいであろう。しかし、ともかくテープの一つ「アストラルへの旅」を聴いてみた。これは麻原氏が啓示・作曲したものをカッサバ氏と音楽集団が編曲・器楽演奏したと記されている。私はまだ現実の渦に執着しているためか、特に魂が浄化されるというような感じにはならなかったけれども、参考にはなったし、オウムへのめり込む修行のためという範囲を超えて多くの人に示唆を与えうらと思う。

私にとっては、このような経過をたどって前記の三人について、より深く何かが判ってきたことが最も大きい成果であるといえる。これからも、

歌うことの喜びと器官への影響（マライア）

楽器との対的關係の自覚（エンヤ）

古代アジア以来の巫女性の現代化（みゆき）

などを媒介して、音と宗教（だけでなく、幻想性構造の総体）の原初と終焉をとらえていきたい。

3―橋本治『宗教なんかこわくない!』（95年7月）で一番感心したのは、テレビで流された麻原氏の「信者のためのテープ」の声へ修行するぞ……修行するぞ……修行するぞ……の語尾が勢いよく上がらず、逆に下がっていることへの注目である。橋本氏は、この話し方は、他人から一度もまともに扱われたことのない人間の話し方であると結論づけている。この結論には直ちに同意し難いけれども、着眼点には感心した。他の論点のどれよりも。